俺、下僕です。

猫宮　胡桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺、下僕です。

【Ｎコード】
Ｎ２００１Ｍ

【作者名】
猫宮　胡桃

【あらすじ】
俺は「普通」が嫌いじゃなかった。いや、むしろ好きだったかもしれない。でも、「異常」も悪くない。そう思った。
―――ごくごく普通の中学生が異世界にトリップ！
とびっきりの下僕ライフが幕を開く。
『ツンデレ姫のわがままにどうかお付き合いください。』

ハジマリ。（前書き）

楽しんでいただけるとうれしいです。

ハジマリ。

青々と茂るたくさんの木々に囲まれて、俺は真夏の暑い太陽の下。
もちろん、何の意味もなくこんな無駄に暑い中で山道を歩くほど俺は馬鹿じゃねぇ。ちゃんと”家に帰る”って目的があってのことだ。
俺の通っている学校はなぜか山の頂上にある。学校紹介のパンフレットなんかでは”見晴らしがよく、毎日素敵な景色を見ることが出来ます”なんて書いてあるが、俺たち生徒にとっちゃいい迷惑だ。
でも仕方ないんだ、まだ義務教育の分際で贅沢なことなんて言ってらんねぇ。だから、歩くさ。蒸し暑い山道を男(ダチ)とな。

「なぁ、京也。今日は何日だ？」
こいつ。俺の幼なじみでダチ。チビでバカで、名前は田中……何だったか。
「知らね」
「そうか……」
こんな無意味な会話を何年つづけてきただろう。
さすがに飽きる。
「なぁ、今日は何曜だ？」
「知らね」
「そうか……。なぁ今日は……」
「お前、なんなんだよ。いいかげん、ウザいぞ」
「そうか……」
こいつ、頭いかれてんじゃねぇか。
どんだけ「そうか」が好きなんだよ……。
まぁ、仕方ねぇか、暑いからな。おかしくなるのも分かる。
でも本当、並みの暑さじゃねぇ。今年で一番かもしれない。「嵐の前の暑さ」ってやつか？　今日なんか大事件でも起こったりして。

って俺まで頭おかしくなってきたかも。
やべぇ、田中の「バカ」が感染病だったなんて！
「なぁ、京也」
「今度はなんだ？」
それでこそ俺だ。俺は冷静な奴なんだ。田中のペースに巻き込まれるんじゃないぞ、俺！
「明日から夏休みだな」
なんかマシなこと言ってるぜ、田中が。
「ああ」
そう、俺らは明日から夏休みなんだ。
運良く補習も逃れられたし、家でのんびり過ごす予定だ。
勿論、となりにいるバカは補習だけどな。
……。
……。
……。
「つまんねぇ」
マジでつまんねぇよ。
暑いし。
田中は頭いかれてるし。（俺は大丈夫）
アブラゼミはうるせぇし。
暑いし……。
「つまんねぇなんて言うなよ。『笑う角には福来る』っていうだろ。そんなこと言ってるとマジでつまんなくなんぞ。とりあえず笑っとけ」
このバカ、なにげにいいこと言ってやがる。
でもつまんねぇもんはつまんねぇよ。
「あはははは」
それに、笑えって。んな簡単に笑えっかよ。
◆◇◆◇◆◇
「あの」

背後から凛とした声がした。
ん？田中……じゃないよな。誰だ？
「お、おい。京也、後ろ」
目を大きく見開いてぽかんと口をあけている田中。
「あ？後ろ？」
振り返って俺は絶句した。
サラサラのベリーショート。
パッチリとした二重の瞳。
フリルのいっぱいついた服。
そう、よく都会でお目にかかれる。
メイド様。

俺は久々に感動した。
まさか、こんな田舎でメイド様にお会いできるなんて。幻覚じゃないよな。
「あの、ちょっと一緒に来てもらえませんか？」
――ああ。
俺は無意識にうなずいてしまった。
てか、メイド様にたのまれて断るなんて男じゃねぇ。
「では、行きましょう」
メイド様は俺の手をとって走り出した。
山の奥深くへと……。
行くところなんてどこでもいいさ。
だって俺。メイド様と手つないでるんだぜ。
「ちょっと～、オレはぁ？　京也だけずるいぞ～」
後ろで田中の声がするが、んなこともどうでもいい。てか、今日まじで大事件起こったよ！

「おっと……」
メイド様が急に止まるもんだから俺は危うく転びそうになった。

「見てください。奇麗でしょう」
俺の目の前にはあまり大きいとは言えないが、たしかに奇麗な湖があった。
おもわず、見とれてしまった。ここで「君のほうが奇麗だよ」なんていったらロマンチックな雰囲気になるか、しらけるかだな。
俺は後者の可能性も考えた末、黙って湖を眺める。

そのときだった。

「失礼」
は？
その瞬間、俺は背中につよい衝撃を感じた。
つまり、メイド様に突き落とされたんだ。湖に……。

なんとか這い上がろうと必死にもがいても、身体はどんどん吸い込まれるようにして沈んでいく。

ごぼっと一気に大量の水が口に流れ込む。
いくら現役中学生でも限界ってもんがあるんだ。

苦しい……

俺はそのまま意識を失った。

ハジマリ。（後書き）

読んでくれて有り難うございました。
アドバイスや感想もらえると嬉しいです。

アリス。（前書き）

楽しんでくれると嬉しいです。
よろしくおねがいします。

アリス。

「ん、んん……」
俺は目を覚ました。というか意識を取り戻した。
ぼんやりとしていた景色がだんだんと鮮明になってくる。
目の前に広がるのは真っ白な天井。
ギラギラと輝くシャンデリア……。
「ここは……天国、か？」
天国が素敵なとこだっては聞いたことがあるけど（田中情報）まさかこんなお城みたいなところだったとはな。
あぁ、短い人生だったぜ。
来世こそは長生きしてやる。
「天国なんて行かせないわよ」
は？　ここ天国じゃないのかよ。
まさか、地獄か？
俺、そんなに悪いことしてねぇぞ。
てか誰だよ。
「あんた、誰？」
声がしたほうに視線を移す。
ロングの柔らかな金髪。
奇麗な瑠璃色の瞳。
まるで人形のような顔立ちの女の子。
頭のてっぺんにちょこんと乗っている王冠がよく似合っている。
「その口の利き方は何？　私を誰だと思ってるの？」
いや、アンタが誰なのかはさっき聞いたばっかりなんですけど。
「仕方ないわ、教えてあげる。私は国王の娘・アリスよ」
自慢げに言うが、国王の娘って……。
日本に国王なんていないぞ。せめて総理大臣くらいにしとけよ。
こいつ、田中並みに頭いかれてんじゃねえか。

「じゃ、ここはどこ？」
分からないことは積極的に聞くべきだからな。
１つずつ、解明していこう。
って優等生の友達が言ってた。
「ここは魔界だけど。それより敬語で話しなさい」
魔界？
ありえねぇ。
ああ。死後の世界のこと、魔界っていうのか？
で、俺は天国でも地獄でもなく、魔界とやらに来たと。
「魔界ってどういうことだ？　俺はなんで魔界にいるんだ？それに……」
「あなた、質問が多すぎよ」
しまった！これじゃあ、田中と同類じゃないか。
「面倒だわ。ソフィア、説明してあげて」
ソフィア？
「はい」
部屋の端にずらりと並んでいる使用人の中から一人の女の子がこちらに歩いてくる。
ああ、メイドか……。
ん？
メイドが近づくにつれてその子の顔がはっきりと見えてくるわけで……。俺は彼女の顔に見覚えがあった。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
あのメイド、俺を突き飛ばしやがった奴じゃねぇか！
何でここにいるんだよ。
「こんにちわ。それでは説明しましょうか」
メイドはにっこりとほほ笑むけど、俺には悪魔の笑みにしか見えない。
「頼む」
ついでになぜ俺を突き飛ばしたのかも聞かないとな。

ったく。もうメイドはこりごりだぜ。
「ここは魔界です。わたしが貴方を連れてきました。なぜかというと、姫様に頼まれたからです。『魔界に来たそうな人間を連れてこい』と。わたしが該当者を探しているときに貴方を見つけたのです。『つまんねぇ』といっている貴方を」
まるでロボットかのように、要点だけを話す。
そんな事より、なんで俺なんだよ。つまんねぇって言っただけじゃねぇか。
「わたしは『つまんねぇ』＝『こんな人間界なんてつまんねぇ』＝『もう、別世界へ行きたい』と解釈いたしましたので」
おいおい。それはちょっと無理あるだろ……
こいつも田中級の脳みそだな。
「で、その姫様はなんで俺を呼んでたの？」
いきなり怒鳴り散らすのは俺の性に合わねぇから、とりあえず冷静な態度を保つ。
「それは……」
俺はショックを受けながらも、その言葉に驚いた。

アリス。（後書き）

読んでくれて有り難うございました。
これからも宜しくお願いします。
感想やアドバイスのほうもおねがいします！

下僕ライフ。（前書き）

よろしくお願いします。

下僕ライフ。

「それは、貴方を新しい下僕にしようとしていたからです」
俺が、下僕？
下僕って、あの下働きの可哀想な男か？
は？意味わかんねぇよ……。
「俺はな、ひとりの人間だ。人間には人権が有るんだぞ。発言の権利も有るんだぞ」
だから、俺は下僕なんかに……
「貴方は『下僕』なのです。下僕には何の権利も、人権もありません」
人間以下ってことかよ。ふざけんなっ。
「下僕になるのが嫌なの？」
偉そうなアリスの声。
「当たり前じゃねぇか」
普通そうだろ。
「あたしみたいな高貴な貴族の下僕になれるなんて幸せなことなのよ。嬉しいことなのよ」
自意識過剰っていうんだぜ、あんたみたいな人。
「断る」
これが無難だよな。俺は早く人間界に帰って夏休みを満喫するんだから。
「じゃあ……」
なんだ？
俺がアリスのほうに顔を向けると、そこにあったのはあの奇麗に整った顔じゃなくて、恐ろしいモノだった。
細くて、銀色で、シャンデリアの光を浴びて輝くモノ……剣。
「死んで」
おい、待てって。

「待ってくれ。ちょっと考えさせてくれないか？」
こんな簡単に死ぬのはイヤだぜ。つか、俺死んだんじゃねぇの？
それとも、人間界では死んだけどこっちの世界では生きてるみたいな感じか？
「考える？　働くか、死ぬかを？」
「ああ。少し時間をくれ」
アリスの目が怪しく光を帯びる。
「敬語！！」
剣を振り上げるアリスは生き生きしていた。
メイドといい、アリスといい……魔界（ここ）では殺人はいいことなのか？
「えっとぉ。少し時間を下さい」
「いいわ。１０秒よ！１０、９、８……」
短すぎだろ。俺はどうすればいいんだ？
「はい、タイムアップ。で？」
「殺して……」
死んだ方がましだ、本物の天国に行ってやる。下僕なんて有りえないかんな。

・・・

「え？殺してもらうなんてイヤ？　下僕になる？　あら、そう」
酷い。こいつ、死なせてもくれねぇのか……。
人の話も聞いてくれねぇのか……。つまり、俺は姫様とやらの”下僕”になるってことか。
「そういえば、貴方。名前は？」
聞くの遅くね？
「月方　京也」
「ツキガタ　キョウヤ？ふ～ん、じゃあ貴方のことは『ジル』と呼ぶわ」
ジル？
なんで？俺の名前「じ」も「る」入ってねぇし。
「あたしの一番最初の下僕の名前よ。いい黒猫だったわ。ちなみに

貴方は３１５代目の下僕よ」
下僕、多すぎね？てか、俺は黒猫の名前で呼ばれるのか……。
「ソフィア、ジルに『下僕の１０か条』を教えてやって」
「かしこまりました」
『下僕の１０か条』ってなんだ？めんどくさそう……。
「ジルさん、しっかり覚えてくださいね。
第壱条、アリス様とは敬語で話す。
第弐条、アリス様の指示にはかならす従う。
・
・
・
第十条、アリス様を守ること。」
長すぎだろ、覚えらんねぇよ。俺はな「五箇条のご誓文」が限界なんだよ。

――――――――こうして俺の『下僕ライフ』は幕をあげた。

下僕ライフ。（後書き）

読んでくれて有難うございました。

パーティー。

「ジル、靴を磨いておいて」
「はい……」
今日も元気に下僕やってます。
にしても「靴磨き」って、つまんなすぎだろ。
下僕の制服とやら（案外立派。）を身に付けて、布巾を片手にガラスの靴と格闘中。もともとピッカピカな新品の靴をどう綺麗にしろってんだよ。
――――それから1時間
「行ってくるわ」
アリスが玄関へ来たときには従業員皆が、奇麗に整列していた。その数ざっと１００人！　下僕は俺だけみたいだがな。
「いってらっしゃいませ。」
俺も列の端に並んでぎこちなくおじぎする。
どこに行くのだろうと思っていたら、タイミングよく隣に並んでいたでっかい男の従業員が教えてくれた。まるで俺の心を読んだかのように……。
「アリス様は叔父のシャール様の家で行われる舞踏会へ行くのです。」
舞踏会ってマジであるんだな。きっとご馳走がいっぱいなんだろうな。俺も行きてー。
「下僕などの分際で舞踏会なんて行けるわけがありませんよ。」
ああ、やっぱり。って、なんでお前……。エスパーか？　さっきから気持ちわりぃ。
「勘だけはよろしい様ですね。気持ち悪いとは失礼ですが」
こ、こいつ、マジでエスパーだ。てか、ごめんなさい、酷いこといって……。
「いえ」

それっきり男は黙ってしまった。
やっぱり、ここは魔界なんだなぁ。エスパーいるし。

「う、うあぁぁぁぁああああ！！！」
耳を劈くような悲鳴。

どうしたんだ？
悲鳴がしたほうで何があったのかは俺の居るところからは見えないが、従業員達のざわめきが広がる。
「ドクターを呼んできて」
アリスのキリっとした声が響く。

アリスの指示で人だかりが徐々に無くなっていった。
そして、見えたんだ。
アリスの護衛の横たわる姿が。口からたくさんの血をはいた護衛の目には、もはや生気など欠片も無かった。
殺しても死ななそうなほどに頑丈な体つきの男が、目の前で死んだ。
よくある事なのか？　なんて恐ろしいとこなんだよ、魔界（ここ）って。
「あたしはパーティーに行かなくてはならないわ。代わりの護衛が必要よ、誰かいないのかしら？」
皆、口をぎゅっと結んで、首を縦に振らない。
まぁ、仕方ないよな。こんなことがあったんだから。
まるでアリスがパーティーに行くのを拒むかのように護衛が殺されたんだ。だから、アリスの護衛をしても生きて帰ってこられる保障なんて無いんだろう。
「まったく、誰もいないの？　じゃあ、ジル。あんたにする。早く来て！」
「ふぇ？」
舞踏会の護衛に下僕を連れて行くなんて、聞いたことねぇぞ。

俺は驚きのあまり、間抜けな返事しかできなかった。
俺は、行かなきゃいけないんだよ、な？
アリスは馬車に乗っていた。馬車って、時代遅れじゃねぇか？
でも父さんのワゴン車よりもずっと高そうだ。
ふかふかのソファに、やっぱりここにも小さなシャンデリア……。
金持ちなんだな。
「乗って！」
俺はアリスの向かいのソファに腰をおろした。
「アリス……様。なんで俺なんですか？」
やっぱり敬語は難しい。
「従業員には人権が有るんです。強制はいけませんので」
アリスの隣のソフィアが変わりに答えてくれた。
つまり、下僕の俺ならどんなコトだって強制できる。ってことか……。
「ジル、護衛の服に着替えなさい」
俺はアリスに渡されたソレに別部屋（馬車なのに5部屋はあるらしい）へ行って着替えた。さっきの護衛とおそろいの黒のタキシード。
死体とおそろい……。
あまりいい気はしないが仕方ない。部屋にあった鏡に自分の格好を映してみる。自分で言うのも悲しい気がするが、ぎこちない。少なくとも護衛には見えないな。
つか、舞踏会に中学生の餓鬼（ガキ）連れてくってどーよ。
馬車の揺れが止まった。どうやら着いたようだ、舞踏会会場に。
「ジル。よ、よろ……し、く」
アリスはそっぽを向いて言った。
アリスはお姫様だから、きっと人に物を頼むのが苦手なんだろう。
それなのに、俺のために頑張って言ってくれたんだと思うと嬉しか

った。自惚れすぎかもしれねぇけど、こんくらい思わないと正直下僕なんてやってられないぜ。

「任せてください、アリス様」

それっぽく言って、白い手袋をはめた拳を胸にあててお辞儀してみる。

あからさまに「馬鹿じゃない？」みたいな視線をアリスに向けられたけど……

今日だけは立派な護衛になってやる！！！

――――――――だから、元の世界に、人間界に帰らせてくれよ……

パーティー。（後書き）

読んでくれて有難うございました。これからもよろしくお願いします。

レジームゲーム。

「あたしはアリス。こいつは護衛のジルよ」
アリスはてきぱきと手続きをこなす。
「護衛はジャンという者だと伺っておりますが」
メイドさん、そういうことは聞かないほうがいいと思うよ。世の中には聞いていいことと、ダメなことがあるんだよ……。
「ジャンは体調不良なのよ」
あまりにも淡々と言うもんだから、少し感心してしまった。やっぱり、慣れてるんだろう。
「かしこまりました。どうぞ」
重々しく扉が開かれる。大きな城なだけあって、玄関もかなり立派で大きかった。
アリスはヒールの高い靴をコツコツと鳴らして歩く。パーティーって靴は脱がないんだな。てっきり玄関みたいなもんがあるんだと思ってた。

「アリスちゃん！！！」
ホールに着くとすぐ、女の人が駆け寄ってきた。黒髪に黒い瞳、そして黒いドレス。魔界（こっち）に来て初めて日本人らしい人を見た気がする。こういう人を黒ずくめの女っていうのかな。なーんて思ったり。
「ファリーヌお姉さま」
ふぁりーぬ？お姉さま？アリスって姉妹いたんだな。にしても似て無すぎだろ、髪の色も目の色も違うじゃねぇか。
「久しぶりだね、アリスちゃん」
性格も全然違うし。ファリーヌは「元気いっぱい」って感じなのに「久しぶりです、お姉さま」
アリスはいたって冷静だ。
二人が見つめ合ったとき、不思議な感じがした。

空気が凍りつくような感覚……。
「じゃぁね、ありすちゃん！」
ファリーヌは笑顔のままアリスに手を振ると別の人のところへ向かった。
さっき感じたのは、気のせいだったんだろう。
仲良さそうだし。

その後、アリスは２０人ほどの人とあいさつを交わした。そのうち４人がアリスの兄弟だということが分かった。お兄さんとお姉さんが二人ずつ。つまり、ファリーヌとアリスも合わせて６人兄弟だったんだ。でも、みんな似ていなかった。

◆◇◆◇◆◇◆

急に部屋の明かりが消えて、１人のおじさんだけがライトに照らされた。高そうな服を身にまとっている。あれが、きっとアリスの叔父さんだ。
「えぇ、この度は舞踏会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。我がレジーム家の親族が全員集まれたのは皆様のおかげです……」
全員、親戚だったのかよ。多いなぁ、さすが王族。
「……今回、皆様にお集まりいただいたのは他でもない「レジームゲーム」の開会式を行うためでございます」
とたんに歓声の声が上がった。しかし、隣にいるアリスの表情は険しいものだった。
「アリス様？どうしたんですか？」
「……」
聞こえてないのか？
「アリス様！」
「え？　何？」
「険しい顔してたから、です」

すると、アリスは何か決心したかのように手をぎゅっと握った。
「ちょっと来て」
アリスに連れられて、廊下に出た。冷房が効いていて、少し肌寒かい。
「ジル。ここに来たからには貴方にも「レジームゲーム」に参加してもらわなくてはいけないわ」
決まり悪そうにアリスは顔をしかめる。
「れじむげーむって何？　……ですか？」
「レジームゲームよ。レジーム家の後継者を決めるゲームのこと。あと敬語、練習しておきなさい」
う……。俺、国語は苦手なんだよ。
てか、後継者ってゲームで決めるのか？　魔界ってやっぱり変なとこだな。
「で、貴方も参加してくれるわよね？」
まあな。俺、下僕だし。
「これだけは自分で決めていいわよ。」
下僕なのに？　でも、断るのも悪いし。それに、また剣突きつけられるのはイヤだ。
「参加するよ……じゃなくて、参加します」
「本当にいいの？」
「はい」
だって、ゲームなんだろ。
「ありがとう」
アリスは、今まで見たことも無いような笑顔で言った。
「じゃあ、もう敬語で話さなくていいわ」
マジで？　下僕の十か条、破っていいの？　てか、なんで？
「お礼みたいなものよ。それにあんたのぎこちない敬語なんて聞いてて疲れるわ」
酷い言われようだが、これには返す言葉がない。
「あ、でもそれだけよ。他の約束は守ってもらうわ」

あぁ、残念。でも、敬語から逃れられるんだ、よかったぁ。
「じゃ、戻るわよ」
「ああ」
ホールでは「レジームゲーム」とやらのルール説明が行われていた。
「このゲームは……」
俺はその言葉を聞いて後悔した。

レジームゲーム。（後書き）

読んでくれてありがとうがございました。至らぬ文章だったと思いますが、感想や、アドバイスいただけると嬉しいです。

スタート。

「このゲームは、いわゆる『生き残りゲーム』です。兄弟を全員たおして最後まで生き延びたものが次期後継者となるのです。参加権利は国王の子供のみに与えられます。その他の方は誰が時期後継者となるかを予想してください。見事正解した方には、より高い地位を与えます」

ゲームって『殺し合い』だったのか……。それでアリスはあんな態度を……。てか、兄弟で『殺し合い』って残酷すぎだろ！

ふと横を向くと、アリスは悲しみと怒りが入り混じったような、そんな目をしていた。

「ジル」

「ん？」

「死んじゃ……だめだからね」

アリスはそういって目をそらした。そっけないけど、俺はそんなありすの優しさが嬉しかった。

「ああ。アリスもな」

そのためには生き残らなくちゃいけないんだ。そして、アリスの兄弟を……。

「ええ。このあたしが死ぬわけないでしょ」

この意地っ張り。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「えぇ、投票結果を発表いたします」

投票すんの早くね？

「第１位　長男・レザン様――――――１７票

第２位　長女・マリンヌ様――１５票

第３位　次男・グラン様――――０８票

第４位　次女・モネ様――――――０６票

第５位　三女・ファリーヌ様―０３票
最下位　四女・アリス様――――０１票という結果になっています」
名前、覚えらんねぇ。ってそんなことより、最下位って何なんだよ！１票って、少なすぎだろっ。
「アリス。これはどういうこと？」
「１票も入るなんてすごいことよ」
最下位ですごいって……。は？
「だってあたし、末っ子だもの。権力なんて『０』（ゼロ）に等しいのよ」
そりゃ、すごいな。別の意味で。

俺、絶対死ぬ。

今度こそ俺、確実に死ぬ。

だってそうだろ？
普通、敵は弱い奴から消していくじゃないか。

俺、１番に殺される……気がする。

◇◆◇◆◇◆◇
「ルールは簡単です。相手を倒すためならどんな手を使ってもいいです。兄弟同士で手を組むのも有りです。仲間だってつくっていいですよ。獣人だろうと、幽霊だろうと、妖精だろうと」
適当だ。すっげー適当だ。なんでも有りって……。
「アリスは誰かと手を組んだりはしないの？」
「レザンお兄様あたりと手を組めればかなり有利なのでしょうけど」
ああ！その手があったか。俺、生き残れるかも！
「そうすればいいじゃん」

「あたし、お兄様とは仲が悪いのよ」
あぁ……。アリス、わがままだもんな。意地っ張りだし、冷たいし。「フレンドリー」って言葉がめちゃくちゃ似合わない。
「じゃあ、他の兄弟は？」
「あたし、みんなとも仲が悪いの」
そうですか……。俺、マジで死ぬかも。
「でも、レザンお兄様とマリンヌお姉さまは仲がいいのよ。きっと手を組むに違いないわ」
つまり、1位と2位が手を組むってこと？
「アリスは2人に勝てるの？」
「ええ、もちろんよ」
どこから沸いてくるんだ？その自信は。
「どうして？」
もしかしたら、必勝法でもあるのかもしれない。
「私の勘よ。結構当たるの」
俺の期待を裏切ってアリスは自慢げにほほ笑んだ。

その笑顔を、俺は守りたいと思った。

ずっと、となりで笑っていて欲しいと思った。

何でかは分からないけど、そんな気がした。

死ぬかもしれないって言うのに、そう思ったんだ。

俺、おかしくなっちまったのかもしれない。

スタート。（後書き）

読んでくれてありがとうございました。

ヨウカイ。（前書き）

ここまで読んでくれた皆さん、ありがとうございます。楽しんで読んでくれると嬉しいです。

ヨウカイ。

「ゲームスタートは今夜１２時。最後の１人になったところで、ゲームは終了です。では皆さん、これで開会式を終了いたします」
なんか、すげーことになっちまった。城の従業員がここに来るのを拒んだのはジャンが死んだからじゃなくて、このゲームに参加したくなかったからかもな。
「ジル、帰るわよ」
え～。まだ何にも食ってないんだけど。
「アリス、もうちょっとだけここに……」
「だめよ」
即答された。なんで？
「ゲームスタートは今夜なのよ。ここには敵が５人もいるわ」
そういうことか。ここはたしかに危険すぎるな。
「じゃあ、帰った方がいいよな」
俺はご馳走に後ろ髪を引かれながらも馬車へ向かった。
あいかわらず立派な馬車だ。
中にはソフィアの姿があった。そういえば、城にはいなかったもんな。一緒に来る意味無かったんじゃないか？馬車の見張り番とか？
「なぁ、アリス。ソフィアはゲームには参加しないのか？」
「下僕っ！」
ソフィアは珍しく大きな声を出した。なんだ？いきなり。
「下僕のぶんざいでその口の利き方はいけませんっ！下僕の１０か条、忘れたんですかっ！」
これは、アリスに許可をもらって……。あれ以来ソフィアは俺を立派な下僕にするための教育係らしきものになっている。
「ソフィア、あたしが許可したのよ」
「な、なぜです？」
ソフィアが真剣な顔つきになる。よっぽど驚いたんだろう。俺か

らしたら大してびっくりするような事でもないけど、ソフィアのアリスへの忠誠心は凄いからな。ここ何日か下僕やってて分かった。
「借りが出来たから」
借り？ああ、ゲームに参加することか。たぶん。
「そうですか、失礼致しました。あの、借りというのはもしや「レジームゲーム」ですか？」
レジームゲームってそんなに有名なのか？ソフィアも知ってるんだな。
「ええ」
「アリス様、私も参加させていただけませんか？私の力、お役に立てると思います」
チカラ？あのエスパーみたいな？
「いいの？ソフィア。あなた、死ぬかもしれないのよ？」
「かまいません。アリス様をお守りできるのなら」
ソフィアって案外、いい奴なのかもしれない。
「ありがとう。じゃ、あなたも敬語、免除してあげるわ」
「いえ。そんな無礼、私には出来ません」
は？マジかよ。せっかくのチャンスなのに、もったいねぇ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「ただいま」
「おかえりなさいませ」
アリスを城中の従業員でお迎えする。
「ジャンの死体はどうしたの？」
玄関はジャンの死体が無くなり、奇麗に掃除されていた。
「奥の部屋へ置いてあります」
「そう。じゃあ、冷凍室へ運んで」
魔界（ここ）じゃ、死体は埋葬しないで冷凍すんのか？
「アリス、なんで冷凍すんの？」
「このゲームに勝った者には力が与えられるわ。そこで治癒能力を

もらって生き返らせるの。そのためには原形をとどめておかなくちゃいけないでしょ」
ゲームに勝つことを前提に話してる。こりゃ、勝たなくちゃいけないな。
「アリスって優しいのな」
「何言ってるの？別に、これは姫として当たり前のことだし……」
アリス、もっと素直になればいいのに。せっかくほめてやってんのにさ。
「げ、ゲームの準備しないと」
そういってアリスはつかつかと歩いていく。俺もその後に続く。
「そういえば、あんた人間だったわよね」
「ああ」
そりゃ、もちろん人間ですけど。
「どうやって戦うの？」
……？普通に剣とかピストルとか使うんじゃないの？
「魔界にいる者のほとんどは自分の力？のようなもので戦うんだけど」
そういえば、ソフィアも「私の力」とか言ってたな。
「例えば、ソフィアは吸血鬼（バンパイア）よ。だから血を吸うことが出来るわ。あとは魔法使いに、ゾンビ。エスパーとか、透明人間とか、獣人とか……いろいろいるわ。みんな、その力で戦うの」
ソフィアがバンパイア？てか、ほとんどがそういう奴ってことはこの城だって妖怪の溜まり場みたいなもんじゃんか。俺、そんな恐ろしいとこで働いてたのか。
「じゃあ、俺はその妖怪みたいな人と戦うの？どうやって？」
「だから、それはさっきあたしが聞いたじゃない。知らないわよ」
嘘だろ。俺、きっと1撃で死ぬじゃん。
「困ったわね。じゃあ、とりあえずソフィアに相談してみて。あの子の知識はかなりのものよ。たぶん玄関にいるわ」
「わかった」

バンパイアのとこに行くのか。もう暗くなってきたし怖いな。

◆◇◆◇◆◇◆◇

玄関ではソフィアが箒を持って掃除していた。

「ソフィア」

「なんですか？」

一旦掃除を中断してこっちに来てくれた。

「俺さ、人間なんだけど、どうやって戦えばいいのかな？」

「んんー、そうですねぇ」

顔をしかめて顎に手を当てる。しばらく考え込んでなにか思いついたのか口を開く。

「あなた自身に力が無いわけですから、力のある武器を装備してはいかがでしょう？」

「力のある武器？」

「ええ。変身能力のある者に武器化してもらい、それを使うのです」

さすがだ。ソフィアに相談してよかった。よく理解できねぇけど。

「その変身能力のある者って誰？」

「妖精ですね」

妖精か。あの小さくて、羽がはえてる……。弱そうだな。

「で、妖精ってどこにいるの？」

早く頼みに行かないとな。ゲームが始まっちまう前に。

「牢獄です。よかったら一緒に行きます？私もそろそろ食事に時間なので」

牢獄？そしてなぜ食事？

「悪いことをして捕まった妖精がいますから」

「俺はその悪いことして捕まった妖精を武器にするの？」

どうせならいい妖精が良かった。

「時間が無いのでしょう？いい妖精はここから２０００億キロ離れたところにしかいないので」

２０００億キロ。たしかに無理だな、仕方ないか。

「じゃあ、その牢獄に連れて行ってくれる？」
「はい」
城から出て、森の中を歩く。薄暗い中、変な形の植物のなかを歩くのはなかなか恐ろしいもんだ。ソフィアと一緒でよかった。
「さっき、食事がどうとかって言ってたじゃん。食事の時間なのに連れ出しちゃって悪いな」
「いえ、私、食事は牢獄でするんです」
牢獄で食事って、なんでそんなことを？アリスの命令か？
「アリス様が……」
やっぱりそうなのか。酷いだろ、さすがにそれは。
「牢獄の者達の生き血なら好きなだけやる。っておっしゃったので」
そう言って嬉しそうに頬に手を当てる。
バンパイアだったもんな。そっか……。
「ここです、牢獄。今日はエルフの血を頂こうかな。」
そういってニコッと笑ったとき、ソフィアの長い犬歯が月明かりに光っていた。

ヨウカイ。（後書き）

読んでくれてありがとうございました。こらからも、よろしくお願いします。

パートナー。（前書き）

遅くなってごめんなさい。楽しんでいただけると嬉しいです。

パートナー。

「ここです、牢獄。今日はエルフの血を頂こうかな」
恐ろしい。俺、これからはソフィアにはなるべく逆らわないようにしよう。
「じゃあ、入りましょうか」
そこには大きな鉄の扉。トラックが突っ込んでも傷1つ付かなそうなくらい頑丈に出来ている。俺はその扉を押してみたがピクリともしない。
ソフィアは扉に両手を向けると「はっ」と言って目を赤く輝かせた。
その瞬間、
――――――――――ギー
手も触れてないのに、扉が重たい音をたてて開いたのだ。手から波動でも出したのか？
「どうやったんだ？それ」
「コウモリが超音波を出すように、私も見えない力で押したのです」
やっぱり。てか、コウモリの例は要らなかったんじゃないか？
「こんばんわ、皆さん」
ソフィアが言ったとたん、ざわめきが静寂に変わった。
「エルフ12番、16番・妖精はすべて。ここに来なさい」
安心したような声や悲鳴が牢獄中に響きわたった。
「今日は腹が減ってらっしゃるんだろうかねぇ」
「静かにしないとアンタも吸われるぞ」
などなど、様々な声が聞こえる。
俺たちの前に2人のエルフと、100近くの妖精が並んだ。初めて見たのだが、怖い目の奴が多かった。さすが牢獄。
「いただきますわ」
俺がまじまじと妖精たちを見ているとソフィアが嬉しそうに声を

弾ませた。
そして、エルフの首筋に噛み付いたのだ。エルフがうめき声をあげているにもかかわらず、ソフィアはこの上ないくらい幸せそうな表情(かお)をしている。エルフが力尽きたころ、ソフィアはやっと口を離した。エルフの方には痛々しい犬歯の跡。
ふとソフィアに目を向けると、もう1人のエルフに噛み付いていた。

「ごちそうさまでした。おいしかったですわ」
目の前で妖精たちが、自分達も吸われるのではないかというようにびくびくしている。
「妖精、あなたたちの血はまずいからいらないわ。今日はお願いがあって来たのよ」
みんな、ほっとしたように肩を落とす。
「あのぉ、お願いとはなんでございましょう？」
1番年老いた妖精が尋ねる。
「全員、武器に変化しなさい」
妖精たちは戸惑いながらも姿を変えた。
剣、銃、槍……様々なものがある。
「下僕、選んで。あなたのパートナーを」
俺のパートナー。
俺はたくさん悩んだあげく、俺の身長の3分の1はありそうな大きさの太い、金で縁取りされた赤いもち手の剣を選んだ。強そうだろ。んにしても、あんなちっこいのがこんなに立派になるなんてな。
「これはぁ……かなり弱い妖精ね。もう1人強いのを連れて行ったほうが身のためですね」
立派な剣のくせに弱いのかよ。ソフィアはそのもう1人を選んでいる。そしてしばらくして戻ってきた。片手にピストルを抱えて。
「こいつが一番強いです」
プラスチック製で、いかにもおもちゃっていうか、水鉄砲みたい

なのを指して言う。弱そうだなぁ。
「これ、もらっていいの？」
「まだ、契約を交わしていないでしょう。それからです」
契約？めんどくさそうだな。やり方も知らねぇし。
「どうやってやんの？」
「妖精たちにお願いするだけです」
これまたアバウトな説明だ。

でも、とりあえず契約すればいいんだよな。そしたら俺だって妖怪同然なんだよな。
俺はみんなのためにも戦わなくちゃいけないんだから。
そう、みんなのために。アリス、ソフィア、ジャン……

パートナー。（後書き）

今回はアリスが登場しませんでした。次回もあまり出てこない予定ですが、よろしくお願いします。

読んでいただき、ありがとうございました。

ケイヤク。（前書き）

よろしくお願いします。

ケイヤク。

この妖精（てか武器？）にお願いすればいいんだよな。
「えっと、俺の武器になってください」
これでいいのか？
『……』
なんだ？この沈黙は。
「ふふふ、ばっかじゃないの」
は？あれじゃダメだったのか。ソフィアがお願いしろって言うから、お願いしたんじゃないか。てかその話し方はなんなんだよ、いつもなら敬語で話すのに。
「何が違うんだ？」
「契約呪文、いってないじゃん。あはははは」
契約呪文？そんなの聞いてないぞ。恥じかかせやがって。
「てか、何？その話し方。お前、ソフィアだよな？」
「私はソフィアよぉ。あと、この話し方は気にすることないってぇ」
いやいや、気になるよ。普通。
「私、血を吸うとテンション上がるんだよねぇ」
さすがヴァンパイア。でもその変わり様は異常だろ。
「で、契約呪文だっけ？教えて」
「いいよぉ。うんとねぇ『妖精よ、我が名はジル。我と契約を交わし、我がものとなれ』って言えばいいんだよぉ」
酔っ払ったみたいな話し方の割には、呪文のとこだけははっきりしてたな。えっと、その呪文を言えばいいんだな。
「妖精よ、我が名はジル。我と契約を交わし、我がものとなれ」
いいんだよな、これで。
「我が名は妖精２。その契約、お受けいたしましょう」
「我が名は妖精９８。その契約、受けよう」
最初に剣が、次にピストルがしゃべった。そのとたん、俺はうな

じにかなりの痛みを感じた。それからは覚えていない。というか、気を失っていたようだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

小さくうなり声をあげて重たいまぶたを開く。まず見えたのは白い天井とシャンデリアだった。見覚えのある風景。アリスのとこに戻ってきたのか？

「大丈夫ですか？」

そう言って俺の顔をのぞきこんだのはソフィアだった。

「ああ。でも、俺はさっきまで牢獄に……」

どうやって戻ってきたんだ？あんなとこから。

「気を失ってしまったようでしたので、私がここまで運んできました」

運んできたって、よく運べたな。って、ヴァンパイアだからか。あの扉を開けたときみたいに力使ったんだろうな。

「ありがとな。でもなんで俺は気を失ったの？」

「契約を交わしたからですよ。妖精と契約を交わすと体にかなりの負担がかかるので」

あ、じゃあうなじが痛んだのもそのせいか。てか俺なさけなすぎだろ。それくらいで気を失うなんてな。

「じゃ、俺は契約に成功したんだ？」

「はい。無事成功いたしました」

よかったぁ。てか話し方、また元に戻ってるじゃん。やっぱソフィアと言えば敬語だよねな。

「で、その妖精は？」

俺が聞くと、ソフィアはだまってどこかへ行き、2人を抱えて戻ってきた。

「おお、これが俺のパートナーか。よろしくな」

俺は2人に握手を求めた。

1人は緑系の服を、もう1人は赤っぽい服を着ていた。まさにク

リスマスカラーじゃないか。んにしても、やっぱり目つき悪いなあ、こいつら。いじめっ子って感じだな。
「はい」
緑が答える。
「おう」
こっちは赤。
そっけねぇ。ま、とりあえず名前でも聞いとくか。
「なぁ、おまえら名前はなんていうんだ？」
「妖精２です」
と緑。
「妖精９８だ」
と赤。
それ、名前だったのか。番号はさすがにおかしいだろ。
「じゃあさ、俺が名前付けてやるよ」
どうするかな。う～ん……。『みどり』と『あか』じゃ可哀想だよなぁ……。英語で『グリーン』と『レッド』とか？単純すぎっていうか、俺センス無さすぎだろぉ……。
「あの、必死に考えているところ悪いのですがあと３０分で１２時ですが。アリス様のところに行かなくてもよろしいのですか？」
やばっ！早く行かなきゃ！
「アリスはどこ？」
「屋上だと思います」
「屋上って何階？」
「最上階」
んなこと知ってるっつーの。
「だから何階だよ？」
「７８階」
「エレベーターはどこ？」
「ありません。階段で行くしか……」
は？金持ちならエレベーターくらいつけろよ。しかも階段？ざけ

んなっ。
「私が連れて行きましょうか？私も行くので」
連れてくって、どうせ階段に変わりはねぇだろ。
「私の力なら１０秒あれば行けますが」
あの、見えない力を使ってか？
「頼む！！！」
「はいっ！」
威勢良く返事をするとソフィアは俺を抱えて急上昇。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああ」
情けなくも、絶叫してしまった。今まで乗ったどんなジェットコースターよりも怖かったし、早かったと思う。
速度が落ちたのを感じてぎゅっとつむっていた目を開くと、そこはもう屋上だった。
「アリス！！」
「アリス様！」
俺たちは急いでアリスの元へ駆け寄った。
「おそいわ。どうしたらこんなに遅くなるのよ！」
いろいろあったんだよ。契約交わして、気失って……。
「申し訳ありません！」
「悪い」
肩で息をしながらも頭を下げる。
「で？もちろんもう戦えるようになったのよね？」
「ああ」
もちろんさ。
「妖精を使うことにした。こいつら」
俺は手に抱えていた妖精をアリスに見せた。我ながら落とさなかったのはすごいと思う。あんなスピードの中で。
「ふ～ん。で名前は？」
いや、それは俺も考えたんだけどピンとくるのが無くてさ。って、そんな「もう決まってるんでしょ」みたいな目で見ないでくれ。

「えっと、『グリーン』と『レッド』？」
ごめんよ、妖精たち。
「ジルにしてはなかなかいい名前ね」
いい名前なのか？アリスの趣味はよく分からん。
「うぅ、ひっく、ぅぅぅ」
ん？レッドとグリーン、泣いてんのかよ。まあ、そりゃ嫌だよな。服の色で呼ばれるのなんて。だから悪いって……。
「あのさ、名前なんだけどごめ……」
「ありがとうございます！」
「嬉しいぜ」
は？なに？喜んでんの？あの名前で？不思議な奴らだ。ま、喜んでもらえたならいいか。

俺は新しい仲間と共に戦いの始まりを、１２時を迎えようとしていた。

ケイヤク。（後書き）

ありがとうございました。次回、いよいよレジームゲームが始まります。どうぞお楽しみに！よろしくお願いします。

今回も読んでいただきありがとうございました。

ソフィア（前書き）

遅くなってごめんなさい。
今回は息抜きのようなものですが、楽しんでいただけると嬉しいです。

ソフィア

「僕は結構強いんですよね」
グリーンは胸をはる。
「あんな水鉄砲みたいな体でよく言うぜ」
レッドがため息混じりに言う。
「失礼ですね、貴方はかなり弱いくせに」
「んだと、こら」
「威勢だけはいいようですね」

「下僕、こいつらウザいです。どうにかしてください」
ソフィア、かなりイライラした口調だ。でも、どうにかしろって言われてもな。
「どうすればいいんだ？」
「封印でもしてやってください」
封印？
「主人、僕は勘弁して欲しいですね」
「主（あるじ）、俺はやめろよ」
「聞き捨てなりませんね」
「なんだと？」
ああ、たしかにウザいな。こいつら。
「『眠れ、〇〇』って言えばいいんです！早くしてくださいよ」
こりゃ、かなり怒ってるな。女って怖い。いや、ヴァンパイアだから怖いのかもな……。
「眠れ、グリーン」
ひとまず、このインテリ野朗から。
「はは、ざまあみろってんだ」
このヤンキーっぽいのも。

「眠れ、レッド」
2人は倒れるようにして目を閉ざした。これ、封印っていうより催眠術に近くないか？
「俺さ、いつの間にこんなことできる様になったんだ？」
「妖怪と契約を交わすことによって、それを操るのに必要な力くらいは与えられるのよ」
アリスが教えてくれた。とりあえず、こいつらくらいは操れるってことか。俺、すげーじゃん。
「でさ、こいつらどうすればいい？」
俺は熟睡状態のグリーン達を片手に尋ねる。持ち歩きに不便だ。
「ポケットにでも詰めといてくださいよ」
ポケット？かなり無理があるぞ。仮に入ったとしてもこいつらが可哀想な気がする。
「ソフィア、どうしたんだ？」
そんなにイライラして。なんかあったのか？
「食料を目の前にして落ち着いてられる訳ないじゃない。ソフィアは妖精の生き血が大好きだから、仕方ないのよ」
は？だってあいつ、「妖精の血はまずい」って言ってたじゃんか。
「アリス、ソフィアは妖精の血なんて嫌いだぞ」
「ソフィアはね、あんたの武器候補を弱らせちゃいけないと思って嘘をついたんでしょう。そんなことも分からないの？」
俺のために、ついた嘘か……ありがとう、ソフィア。
俺だって、目の前にレアチーズケーキを2つも置かれて、しかも「食べるな」なんて言われたらそりゃめちゃくちゃ怒るだろう。てか、無理かもしれない。
でもこれからは俺、この妖精達と一緒にいないといけない訳だし……。ソフィアをかなり苦しめることになるよな。せめて、血に似たものでもあげられたらいいんだけどな。トマトジュースとか……。あ、そうしたらいいじゃんか。でも、魔界（ここ）ってトマトあるのか？
「アリス、トマトって野菜知ってるか？」

「ええ。それがどうしたの？」
知ってるんだ。へぇ、意外。
「ここにある？」
「人間界から輸入したものが厨房にあるわよ」
人間界と貿易してるのか？一応、つながり有ったんだな。じゃあ、もらって作ろう。
「少し分けてくれない？」
「いいけど」
俺は厨房目指して全力疾走。いくら長い階段でも、下りなら楽だ。
「失礼しますっ！トマト、下さい」
俺は厨房に駆け込む。
ひげ面のおっさん（コック）は戸惑いながらもトマトを渡してくれた。
「おっさん、これでジュース作って！」
「どうやって作るんですか？」
コックなら知ってんじゃねぇの。俺だって知らねぇよ。
「適当にミキサーとかでやってよ」
「ああ。細かく切り刻めばいいんですね」
切り刻む？かなり細かくしないとジュースにはならないと思うけど。コックならそんくらい分かってるよな。
「まあ、よろしく」
「風よ、我が力となれ。ハッ！」
おっさんがトマトに手をかざすと、空中でトマトがジュースと化した。見えないなにかにものすごい速さで切られたような感じだった。そのジュースは置いてあったビンにうまく流し込まれた。
つかおっさん何者だよ！？
「おっさん、何なの？」
「わたしは風使いです。包丁が無くても物が切れますので便利ですよ」
便利ってか、なんか怖くないか？凶器じゃんか、その力。

「ふーん、じゃ、これありがとうな」
俺はジュースを持って屋上へ向かう。キツイ、登りはやっぱりキツイ。厨房が53階だったのが不幸中の幸いだな。
「ソフィアー、これ」
肩で息をしながら、ビンを渡す。
「なんですか？これ」
「トマトジュース！」
「なんか、生き血に似てますね」
だろ？さあ、飲んでくれ。
「妖精の血の、代わりに、飲んで」
「でも、わたし生き血以外は口にしたことが無くて。アリス様、飲んでも大丈夫でしょうか？」
なんか、毒薬みたいなあつかいされてるんだけど。
「せっかくジルが貴方のために作ってくれたんだもの。飲んであげてもいいんじゃないかしら？」
まあ、正確には「俺が作った」じゃなくて「俺が作らせた」だけどな。
「じゃあ、いただきます」
ビンの蓋を開けて飲み始めるが、長い犬歯が邪魔して飲みにくそうだった。それにしても、すごいスピードだ。まずくは無いってことだよな？良かった～。
1リットルくらいはあったんじゃないかというほどのトマトジュースはもう無くなっていた。
「すごいです、ジル。妖精の生き血と同じ味です！これなら本物の生き血じゃなくてもいいです」
妖精の生き血とトマトジュースが同じ味？不思議なんだけど……。でも、喜んでもらえたなら良かった。それに、初めて「下僕」じゃなくて「ジル」って呼んでくれたしな。
「ジル。ソフィアにあんな嬉しそうな顔させるなんて、ちょっとすごいわね。あの子の嬉しそうな顔、久々に見たわ。ありがと」

嬉しそうな顔なら、牢獄に行けばいつでも見れると思うんだけど。
「俺、褒められたのか？」
アリスに褒められるなんて珍しい。なんか嬉しいな。
「ちょっとよ。ほんのちょっとだけだから」
アリスはそっぽを向いた。
「ありがとうな、アリス」
「は？何よ、いきなり。下僕に感謝されたって嬉しくなんか無いんだから」
このツンデレ姫、扱いにくい……。
でも、こんな平和な時間がずっと続いてほしい。そう思った。

ソフィア（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。次回は、いよいよレジームゲームがスタートします。よろしくお願いします。

ライホウ。（前書き）

遅くなって本当にごめんなさい。待っていてくれた皆さん、ありがとうございます。お待たせしました。
今回は”ファリーヌ”が登場します！

ライホウ。

俺達は屋上で冷たい風に当たりながら待っていた。１２時を……

「いよいよ始まったわね」

アリスがしんみりとした空気を打ち破るように言った。そう、１２時になったんだ。レジームゲームが始まったんだ。

「アリス。これからどうするんだ？」

「相手が戦いを仕掛けてくるのを待つわ。こっちから仕掛けるなんて馬鹿なまねするわけ無いじゃない」

じゃあ、戦いに備えてればいいんだな。

『ア～リスちゃ～ん♪』

外から甘ったるい声が聞こえた。聞いたことのある声だ。

「ファリーヌの奴、もう来たのね。ソフィア、始末してきて。１人でできるわね？」

始末って……。しかもファリーヌの奴とか言ってるし……。この前は「ファリーヌお姉さま」って言ってたのに。

「ハイ。あんな雑魚、私１人で充分です。全部、いいですか？」

アリスの姉さんのこと、こいつ雑魚とか言ってるし……。

「ええ、全部吸っちゃっていいわ」

「了解です」

そう言ってソフィアは柵を飛び越えてファリーヌの元へ向かった。

「キャー」

ソフィアがいなくなってから数十秒でファリーヌの悲鳴が聞こえた。その直後、ソフィアが屋上に戻ってきた。ぐったりとしたファリーヌを抱えて。

「それは何？」

アリスは不服そうに尋ねる。

「こいつ、戦いに来たのでは無いようでしたので連れてきました」
「そう。で、何かしら？ファリーヌお姉さま」
「今日はアリスちゃんとお話したくって……」
つくづく似てない姉妹だな。
「３０字以内で用件を言いなさい」
アリスは国語のテストに良くある問題のような口調で言う。
「アリスちゃんと、手を組もうと思ってお願いしに来たの。」
手を組みに来た？良かったじゃないか、あっちから来てくれるなんてな。
「お断りいたします。ソフィア、吸いたい？」
「ハイ！！」
なんで断った？せっかくのチャンスなのに、もったいねぇ。
「あのね、ちょっとでいいからお話、聞いてくれないかな？」
なんか、弱そうだな。ファリーヌって。本当にアリスの姉さんなのか？
「アリスちゃんの大好きなショートケーキ、あげるからぁ」
食べ物で釣ろうとしてる……。ショートケーキかぁ、俺も食いてぇ。
「あたし、ショートケーキなんて好きじゃないわよ。それに自分の好きなものは皆も好きとかいう考え、いい加減やめたほうがいいわよ」
ショートケーキ好きなのはファリーヌの方だったのか。んにしてもアリス、はっきり言っちゃったな。きっとファリーヌも傷ついたと思うぞ。
「えぇ～、じゃあ何が欲しいの？なんでもあげるよ。レアチーズケーキ？モンブラン？」
傷ついてはなさそうだな。てか、ぜんぶケーキじゃねぇか。でもアリス、レアチーズケーキはもらってもいいんじゃないか？貰って、俺にくれよ～。
「なんでもいいのよね？」

アリスが不気味な笑みを浮かべる。
「うん。アリスちゃんの欲しいものなら、なんでも買ってあげるよ〜」
ファリーヌ、敵対心とか無さそうだな。
「じゃあ、ファリーヌお姉さまの命、いただけませんか？」
アリスの方は殺気出しまくりなんだけど……。
「命？それはダメだよぉ。死んじゃったらお話できないもん」
「じゃあ、帰ってください」
「え？アリスちゃんはもっといい子だと思ってたのに。酷いよぉ」
こりゃもう心理戦だな。アリスのほうが強そうだけど。
「酷いのはお姉さまの方です。何でもくれると言っておきながら、ダメだなんて」
アリスは眼に涙をためて言う。きっと、嘘泣きだろ。でもすごいな、女優になれるぞ。
「泣かないで、アリスちゃん。命じゃなかったらなんでもあげるから」
「じゃあ、お姉さまのこのゲームへの参加資格」
ファリーヌのこと、ゲームに参加できなくするっていう魂胆か。
「え？それも無理よぉ」
「2度も嘘をつくなんて……。お姉さまはあたしの事がお嫌いなのね……」
アリスはためていた涙を流し始め、顔を手で覆って「酷いわ」って震える声で言う。こんな演技、できる奴なんてそういないぞ。
「アリスちゃん、ごめんね。ショートケーキ１００個でどう？私の命よりも価値はあるわよ」
ファリーヌ、自分の命はショートケーキ１００個以下の価値だって言ってるし。どんだけ好きなんだよ。
「そうですか。じゃあ仕方ないわね」
アリスはてっきり諦めたんだと思った。
「ショートケーキを１０００個あげますから、命をくれませんか？

お姉さま」
アリスも、食べ物で釣りに入ったか。
「１００個じゃなくて１０００個もくれるの？お医者様に止められて自分の家では食べれなかったのよ……。うわぁ、どうしようかしら？」
ファリーヌ……ケーキで心動かされんなよ。まあ、そのほうがこっち的には嬉しいんだけど。
「お姉さま。レアチーズケーキも、モンブランも１０００個ずつあげるわ。これでどうかしら？」
アリス、太っ腹だな。やっぱ金持ちはすげぇ。
「本当なの？アリスちゃん！ケーキ、ちょうだい！」
マジかよ。ケーキのために死ぬなんて悲しすぎだろ。
「じゃあ、命はもらっていいのね？」
「やっぱり、ダメ。歯医者さんに怒られちゃうもん」
そういう問題っすか……。
「そう。じゃあ、帰ってください。あと、１つお願いしていいかしら？」
「うん！」
また、命とか参加資格とかって言うんだろうな。
「あたしを敵に回さないで下さいね、ファリーヌお姉さま」
「うん！約束する」
そう言って黒ずくめの来訪客は姿を消した。

「ふぅ、これで敵はあと４人ね」
「ああ。頑張ろうな」
なんか、このゲーム勝てそうな気がしてきた。

ライホウ。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。ゲームスタートとか言っておきながらなんか、すみません。そのうち、きっと戦います。少々お待ち下さい。
次回もよろしくお願いします。

カコ。（前書き）

次から番外編始めるので、その予告みたいなものです。投稿遅くなった上に、こんなので申し訳ないのですが……。

カコ。

ゲームが始まって以来、初めての朝。今日は快晴だ。いつも通り、頑張って下僕やってます。今だって朝食の準備ができたってアリスに伝えに来たところだ。

「朝食、出来たってさ」

敬語じゃなくていいからな。「アリス様、朝食の準備ができました」みたいな堅苦しいことは言わなくていい。

「やっぱり誰かと手を組んだ方がいいのかしら？」

アリスの表情は天気とは裏腹に曇っている。てか、せめて「あら、そう」くらいは言ってくれたって良くないか？せっかく伝えに来てやったんだから。でも、アリスと会話するのも下僕の役目だからな。ここは適当に答えとくか。

「そうしたほうがいいんじゃないか？」

「でも誰と？」

「ファリーヌは？」

「あいつでいいかしら？」

「だめなのか？」

さっきから俺達はやたら？マークの多い会話をしている。俺はともかく、アリスのほうはファリーヌとの心理戦のダメージが大きくて疲れてる様だ。「ああいう奴と絡むのは精神的にものすごく疲れる」らしい。

「誰だって真っ先に狙うのは弱い奴でしょう。よく考えたら、あたしよりも弱い奴がいたのよ。それがファリーヌ」

まあ、あの心理戦からすればかなり弱そうだが。でも、実際に力で戦うとなれば解からない。ファリーヌにだって仲間はいるだろうし。

「だから、あいつと一緒にいればあたしまで危ないだろうってことよ」

そっか。それなら1人で戦った方がマシなのかもしれない。
「じゃ、誰とも手なんて組まなくていいんじゃねぇの。……ところでさ、ファリーヌは他の兄弟とは仲いいのか？」
なんとなく気になって聞いてみた。
「ええ。あいつはみんなと仲がいいわ。人なつっこい性格だから嫌われては無いはずよ」
じゃあさ、ファリーヌが他の兄弟と手を組でもしたらやっぱりこっちが一番危なくねぇか？
「でも、心配ないわ。ファリーヌはあたしを敵には回さないもの。それに、あいつと手を組む馬鹿なんてレジーム家にはいないはずよ」
アリスは俺の心を読んだかのように言った。もしかしたらアリスもエスパーなのかもしれない。
「アリスの兄弟ってどんな奴なんだ？」
会話をつなげようと聞いてみた。それに俺は正直言ってファリーヌ以外の兄弟のことは殆ど知らない。開会式で一度会ったことはあるが、顔しかわからない。
「敵のことは知っておいた方がいいものね。いいわ、教えてあげる」
アリスは近くにあった椅子に腰掛けると話し始めた。俺も黙ってそれを聞いた。

カコ。（後書き）

ありがとうございました。次回からはアリスたちレジーム家の過去の話です。他の兄弟達のことも書いていく予定なので、よろしくお願いします。

グラン。（前書き）

投稿、遅くなっちゃって本当にごめんなさい。
今回は次男・グランが登場します！アリスが６歳の時の話です。ちなみに当時グランは１２歳です。
楽しんでいただけると嬉しいです。

グラン。

『午後の授業が始まります。各自、指定の場所へ移動してください』
城中に機械じみた声がひびいた。ここ、レジーム家では授業の始まりはこのように放送で知らされる。各自というのは、みんな受ける授業が違うからだ。今回のアリスの授業はバイオリン。アリスは譜面やバイオリンを取りに自分の部屋へ戻るところだ。
「バイオリンなんてやらなくても死なないわ」
などと言いながら自室の扉を開ける。
「ア～リ～ス♪」
「キャ――――」
誰もいないと思っていた部屋の中から声がしたため、アリスは驚いて絶叫した。思わず閉じてしまった目を恐る恐る開くとそこにはツンツンした金髪でピアスをジャラジャラつけた、いかにも不良らしい格好の男、次男・グランの姿があった。
「……グラン？」
「うん♪”グランおにいちゃん”でしょ♪」
性格は不良とはかけ離れているが。
「どうしてここに？」
アリスは不法侵入（？）されたことに怒りを覚えながらも訊ねる。
「アリスさ、今日バイオリンの授業だろ？オレ、ピアノなんだよね～」
「それで、何？」
「オレと一緒にさぼらねーか？何時間も怒られるより、反省文のが楽だと思うけど？オレも手伝うからさ♪」
実際、アリスはバイオリンが大の苦手だった。他のことなら人並みに、いや人以上に出来るのだがこれだけはダメらしい。それに比べてグランのピアノの腕はすごいものだ。しかし「男らしくない」といってやりたがらないのだ。

「そうね、今日くらいならいいかもしれないわ。そのかわり、反省文の８割は書いてよね」
　レジーム家一の問題児と共犯者になるのは気が引けたが、アリスは授業をサボることにした。
「８割！？オレの分とあわせて１８０枚か～。せめて５割ならやってあげても……」
「グランお兄ちゃん、１０割じゃ……ダメ？」
　グランの言葉をさえぎるようにしてアリスは言う。アリスは、というかレジーム家の人間はグランを従わせる方法を知っている。とっても簡単なことだ。『グランお兄ちゃん』と呼べばいいだけ。これは女性限定なのだが。
「いいよ♪アリス♪お兄ちゃんに任せて♪」
　グランのテンションは会話の中の「♪」の数に比例する。
「ありがと。で、どうすればいいのかしら？授業が終わるまで」
「それならオレに任せて♪いい場所知ってるぜ♪絶対見つかんないとこ♪」
　グランはそれだけ言うと、アリスを片手で抱えてもう一方の手を窓枠にかけた。
「ぐ、グラン？何をするつもりな……キャ――――――――！！」
　アリスの疑問は途中で悲鳴に変わった。グラン（アリスを抱えた）が窓から飛び降りたのだ。アリスたちが居たのは３２階。普通なら足の骨を折るだけじゃ済まないものを、グランは怪我１つせずに飛び降りて更に全速力で走り出したのだ。もちろん、アリス（放心状態）を抱えたまま。
　人気の無い森に入って２、３分経ってからだろうか。グランが口を開いた。
「アリス～、もう大丈夫だぜ。もうすぐ着くからさ♪」
「え？あ、ん～」
　アリスは我に返った。
「ちょっとグラン！なんて危ないまねを……！」

「せっかくこんないいとこに連れてきてやったのにな～。ちょっとくらいのリスクは付き物だぜ♪」
そう言われて辺りを見回すとアリスは絶句した。あまりに素敵なところだったから。たくさんの木が青々と茂っていて木漏れ日が銀色の花をより一層輝かせている。
「な？いいとこだろ♪オレとアリスしか知らない秘密の場所だぜ♪」
「まぁまぁ気に入ったかもしれないわ」
そんなアリスを見てグランは呆れたように言った。
「はぁ～、アリスも素直じゃないなぁ。まったく……」
「あたしはいつだって素直じゃない」
「どこが素直だって……」
グランはアリスに睨まれて言いかけた言葉を止めて話題を逸らした。
「あの銀色の花はさ、たぶんここでしか見られないんだぜ。絶滅したって言われてる”ムーンライト”なんだ。月の光のように輝くっていう意味らしいよ♪」
「月の光？奇麗な色ね……す、少しだけだけど」
「奇麗だと思うなら奇麗って言えばいいじゃないか。気に入ったなら気に入ったって言えばいい。嬉しいなら嬉しいって。”ちょっと”とか”少し”なんて付けなくてもいいんだぜ。付けるなら”すごく”とか”とても”にしろよ」
いつに無く真剣なグランにアリスは少し驚いたが、その言葉一つ一つが心にしみた。
「素直になりゃいいじゃん♪」
「ぐ、グランにしては良いこと言うじゃない」
「まあな♪珍しいな♪アリスが人のこと褒めるなんて」
グランはアリスから目を逸らしてニヤッと口元を吊り上げた。
「そうかしら」
グランはてっきり「べ、別に褒めてなんか無いわよ」的なことを言われると思っていたため、一度大きく目を見開くとゆっくりとほ

ほ笑んだ。
「アリス、このムーンライトはな人を素直にする力があるんだぜ♪知らなかっただろ」
アリスはこの花の存在自体、今日初めて知ったのだからそんな力も勿論知るはずが無かった。
「知らなかったわ」
「そうだろ～な♪だって嘘だし♪」
「は？グラン、あたしに嘘ついたの？」
「ま、こんくらい可愛いもんだろ♪」
グランはにっこり笑ったものの、アリスの怒りは収まらない。
「最低！グランなんて大っ嫌い！グランなんてレザンお兄ちゃんみたいにダサい格好になっちゃえばいいのよ！」
「は？何が悲しくてあんな黒髪メガネなんかにしなくちゃいけねぇんだよ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆

その後、グランは２００枚の反省文を書かされた。アリスの方はというと、
「ちょっと！勝手に人のこと連れ出したんだから、早く書きなさいよ！馬鹿グラン！！」
グランに嘘をつかれたのが気に障ったらしく、更にツンデレ度が増したのだった。

グラン。（後書き）

読んでいただきありがとうございました！さて、今回からスタートした番外編ですが、どうでしたでしょうか？感想や、評価いただけると嬉しいです。

※今、番外編を書いていますがこれが終わったら本編の内容に戻ります。

レザン。（前書き）

お待たせしました！今回も遅くなってしまいました。ごめんなさい。
今回は「前の話から数日たった日」と言う設定です。長男のレザンが登場します！楽しんでいただけると嬉しいです。

レザン。

「アリスお嬢様、レザンお坊ちゃまを知りませんか？」
新人のメイドだと思う。最近城の従業員を増やしたとは聞いていたが、王族と直接話が出来る身分の者だとは思っていなかったためアリスは眉をひそめた。
「レザンお兄ちゃんがどうかしたの？」
「もう食事の時間だというのにリビングにいらっしゃらないんですよ」
レザンは常に時間を気にしているため、時間に遅れるなどめったに無いことだ。有り得るとすれば『研究』しているときのみ。（研究を三度の飯より愛しているらしい）よって今、レザンは研究室に居るというのが最もな意見だと言える。
「居る場所なら分かっているわ。あたしが連れて行くから他のみんなには先に食事を取るよう言っておいて」
レジーム家は家族そろって食事を取るのが習慣となっている。兄弟げんかが酷かった次期に誰かが（おそらく父）「行動を共にすれば仲も良くなる」などと言ったのがきっかけで今や当たり前のようにになっている。
新人メイドは元気に返事をすると食堂に向かって走り出した。そんな初々しい姿を見てアリスは笑みがこぼれた。
「さて、と。研究室に居るはずよね」
アリスも足早に研究室へ向かう。研究室は兄弟の間では別名『隠れ家』や『秘密基地』などと呼ばれている。その理由は行ってみれば分かる。複雑な隠し扉を数十箇所通過しないとたどりつけないのだから。何度か言ったことのあるアリスだってたまに迷ってしまう。
苦労の末、数十分で研究室にたどり着くことが出来た。ドアを数回ノックするが返事は無い。代わりに聞こえてきたのは爆発音。少々身の危険を感じたがアリスは研究室に足を踏み入れた。

「レザンお兄ちゃん？」
アリスの視線の先にはところどころ焦げている白衣を身にまとったレザンの姿と、床に散乱したたくさんの実験用具たちだった。
「アリスですか。どうかしましたか？」
いろんな液体やら機械やらをいじりながらそっけなく訊ねる。
「もう夕食の時間よ」
アリスもそっけなく返す。
「ああ、もうそんな時間ですか」
ピタリと会話が終わってしまった。どっちもそっけないからこの2人の会話はいつもこんな感じなのだ。
「わざわざ来てあげたのに御礼も無いのかしら？」
アリスが不満そうに呟く。しかしレザンはアリスの言葉には反応せず、ふいっとそっぽを向いた。
「レザンお兄ちゃん、無視するのはやめてって言っているでしょう。あたしが何かしたって言うの？」
アリスは少し怒りを込めて言う。
「早くリビングに戻った方が良いのでは？ボクみたいなのと居るよりずっとマシでしょう？」
アリスは前々からレザンの一人称が「ボク」なのを不思議に思っていた。今も、絶対「私」の方がしっくりくるよなぁ。などと考えつつ、今日のレザンがやけにネガティブなのに気が付いた。
「本当になにかあったの？」
ふれてはいけないような気がしたが好奇心で訊ねてみる。
「ボクみたいな黒髪眼鏡のダサい奴とは話さないほうが良いって言っているじゃないですか」
その言葉でアリスはレザンの考えを悟った。「黒髪眼鏡のダサい奴」でだいたい見当は付く。レザンにグランとの会話を聞かれていたんだと。
「レザンお兄ちゃんのこと話してたわけじゃないわよ、きっと勘違いじゃないかしら」

アリスは我ながら見苦しい言い訳だと思った。無論、レザンもアリスの言葉を信じない。
「そうですか、ではこれを見て下さい。記憶（メモリー）」
レザンが言うと同時にアリスの目の前にある画像が映し出される。まるでスクリーンでもあるかのように見える。そこに映し出されたのはムーンライトの花とグラン、そしてアリスの姿だった。
『……グランなんてレザンおにいちゃんみたいにダサい格好になっちゃえばいいのよ』
『は？何が悲しくてあんな黒髪メガネなんかにしなくちゃいけねぇんだよ！』
声まではっきり気こえ、アリスは青ざめる。
「これ、ボクの勘違いなのでしょうか」
勝ち誇ったような強気な光がレザンの目に宿っている。
「……悪かったわ」
アリスが折れた。証拠を見せられては仕方が無い。
「本当に悪かったと思っているのですね？」
レザンが確かめるように言う。
「ええ」
「それなら、償いをするべきではないですか？」
いつものレザンはここまでウザくない。ここまでウザいのも珍しいからただ事ではないのは察しが着く。このままレザンのペースに流されてはいけない気がした。
「別にそこまで酷いこと言ってな……」
「ボクは自殺を考えるほど落ち込みました」
レザンは試験管を片手に持っていう。その中では毒々しい赤がぶくぶくといっている。アリスはこの液体を飲んで自殺しようとしていたのだと思った。
「少しくらいなら償ってあげないことも、無いかもしれないわ」
かなりめんどくさい言い方ではあったがアリスは償うと言ったのだ。その瞬間、眼鏡の下でレザンの目が妖しく光ったように見えた

のは気のせいだろうか。
「では、これの飲んでください。ボクの薬の実験台になるのです」
ずいっと試験管を突き出す。
「レザンお兄さまはあたしを殺したいのかしら？」
震える声で訊ねる。もし、これが本当に自殺するために作られたのならアリスの言っていることは最もだ。
「何を言っているのです？これは美変薬ですが。死にはしませんよ。もしアリスがどうしても命で償いたいと言うのなら話は別ですが」
どうやらこれを飲んでも命に別状は無いらしい。
「びへんやくっていうのは何なのかしら？」
「そのまんまですが。美しく変身する薬ですよ」
レザンは自殺ではなく美しくなることを目的にこの毒々しい液体を開発したようだ。アリスも美しくなるのなら死ぬよりマシだと思い「飲むわ」と言う。
「そうですか、ではどうぞ」
改めてみるとやはり気持ち悪いのに変わりは無いが、目をぎゅっと瞑って一口で飲み干す。喉が熱くなってアリスは咳き込んだ。
「大丈夫ですか、アリス」
「ええ。それでこの薬品は成功作なのかしら？」
恐る恐るアリスは聞くがレザンが珍しく笑顔なのを見て安心した。おそらく成功したのだろう。
「良かったわ」
アリスも自然に笑みがこぼれる。しかし、そこへ降ってきたのは氷より、いや恐らくドライアイスより冷たいであろう言葉だった。
「本当、良かったです。アリスで試して。ボクが失敗作を飲むなんてことは避けられました」
そう言ってレザンは眼鏡を人差し指でクイっとした。
「レザンオニイサマ？」
不安でいっぱいのアリスにレザンは無言で鏡を差し出す。
そこに映ったのは金髪のアリス。

「あ〜あ。栗色の髪の毛、奇麗だったのに……。金髪なんてあのグランとお揃いじゃないですか。良かったですね」
そうニッコリ笑ったレザンの顔はアリスの《恐怖の思い出ランキング・ナンバー1》にランクインしたのであった。
魔力で作られた薬品ゆえ、染めることも出来なければ、再び栗色の髪が生えることも無いのだ。あまりのショックにアリスはしばらく立ち直ることが出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆（その後）
「おはようございます、アリス」
「……」
挨拶してくるレザンをアリスはあらかさまに避ける。
「無視はいけないと思いますが」
「……」
またまた無視。しばらくして、この沈黙を破るように陽気な声が聞こえた。
「アリス！おっはよっ！」
次女・モネだ。アリスはまだモネには恨みが無いため普通に挨拶を交わす。
「おはよう、モネ」
この日、レザンは初めてアリスの声を聞いてのだった。

レザン。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。いつもより長くなってしまいました。
さて、次回はモネが登場する予定です。よろしくお願いします。

モネ（前書き）

投稿、遅くなってしまってごめんなさい。お待たせしました！

さて、今回は次女のモネがメインです。楽しんでいただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

モネ

「アリスお嬢様、本日の午前の授業は体育になっております。さあ、グランドでモネ様がお待ちですよ。いってらっしゃいませ」
メイドは笑顔でアリスを見送るが、アリスは曇った顔をしている。
「モネ……」
姉の名をため息交じりで口にする。グランドではモネが待っている。アリスの体育の授業はモネが指導してくれるのだ。理由は簡単、王族に教える上で必要な体力を持った者がいないからだ。……モネを除いては。モネの身体能力は生まれつきずば抜けていた。だから王族に必要な身体能力は既に身に付けている。そのため、体力を必要とする科目の先生に任命されたと言うわけだ。
重たい足を動かしているともうグランドが見えてきた。
「アーリースッ！！」
そんな声と共に光の速さで突っ込んでくる人物、彼女こそがアリスの姉・モネ。短く切った茶髪と赤いジャージは彼女にとても似合っている。お洒落に着飾るより、この姿の方が彼女らしい。
「モネ、お手柔らかにお願いするわ」
アリスは無駄なことだとは分かっていながらもお願いする。呼び捨てにしているのはモネが「上下関係とか面倒だから気にするな」と言ったため。こんなさっぱりした性格だから、アリスはモネが好きだった。
「ああ、死なない程度にはするから安心しなっ！」
アリスの言葉はやはり意味が無かった。命だけは保証してくれるようだが……。
「今日は何をすればいいのかしら？」
「とりあえず、グランド１００周。アタシはその間に差し入れでも作ってきてやるよっ！」
アリスはモネの「差し入れ」と言う言葉に恐怖を覚えていた。以

前もらったソレは最悪といってもいいくらいの物だったのだから。
今日ももう少ししたら持ってくるのだろう。
「差し入れなんていらないわ。別に欲しくなんてないし」
アリスは正直にそう思った。しかし、
「気にするなって、このツンデレっ娘っ！」
モネはそう言って二カっと笑った。そして「アリスはツンデレだから本当は欲しいのにそうやって言うんだろ？」と。アリスはもう面倒になってきたため、コクンとだけ頷く。が、後にこの行為をとても悔やむことになる。
「まったく、アリスは……」
大きくため息をつかれるが、アリスの方がため息をつきたかったに違いない。
「じゃ、走っとけよっ！」
これだけ言い残すと、またしても光の速さで姿を消す。アリスはかなり重い足を動かして走り始める。５０周目を走りながら、モネは話すとき語尾に「っ！」がよく付くのは何でだろう？などとどうでもいいことを考えていると誰かに呼ばれた。
「アーリースッ！」
無駄に大きな声。城の中で叫ぶのなんてアリスは一人しか知らない。
「も、ね……」
アリスは走りつかれて、息が上がっている。
「準備運動でこんなに疲れちゃダメだろっ！ふふん、そんな時こそ『モネ特製さっぱりゼリー！！』を食うがいいっ！」
差し出された皿の上にはゼリーにはというか、食べ物にすら見えない物体がある。フォークで刺したら「サクッ」なんて音がしそうだ。黒くて透明感が無くてまるで炭のよう。
「これは、何？」
アリスは恐る恐る効く。見た目からして「ゼリー」じゃないことは確かだ。だってモネは料理がかなり下手なのだから。食べ物とは

言いがたいものばかり作る。今頃キッチンは悲惨な状態になっていてコック達が泣いているだろう。
「だから『モネ特製さっぱりゼリー！！』だってばっ！」
アリスは「モネ特製」が付いている時点で危険物だと思った。
「モネは食べたの？」
モネがもう毒見済みなら食べてもいいかな。なんて少しだけ思う。
「ううん、食べてないけど。疲れたアリスより先に食べるなんて悪いだろっ！」
後半怒るようにして言う。アリスは思う……これを食べるとなったら今の数十倍も疲れるだろう、と。肉体的ではなく精神的に。
「いいわよ、モネは頑張って作ってくれたんでしょう？だったらモネが一番に食べるべきよ」
アリスは自分の危機は逃れられたがモネを殺すような発言をしたことに少し後悔する。あんなのを食べたら本気で死ぬと思う。
「そうか？じゃあ、半分こなっ！」
モネがフォークで炭（のようなゼリー？）を刺すと中からドロドロとした液体が出てくる。これがオレンジやピンクだったのならまだ良かったものの、その液体は青色だった。青……食欲が失せる色だ。
「あ……」
モネが一口サイズの物体（炭ですらない）を口に入れた瞬間、アリスは思わず声を漏らしてしまった。
「ん～、美味いっ！」
アリスの心配とは裏腹にモネは美味しそうにソレを食べる。半分に分けた内の片方が無くなるとお皿をアリスに突き出す。
「はい、アリスも食えよっ……」
唇を噛み締めるモネを見てアリスは思いついた。ソレを食べずに済む方法を。
「モネ、あたしの分も食べていいわよ？」
「アリス、お前はいい奴だっ！」

ものすごい勢いでソレに噛み付く。噛みちぎる際に青い液体が口からはみ出すのをアリスは気持ち悪そうに眺めた。

◆◇◆◇◆◇

その日の夜。アリスはメイドによって、モネが体調を崩したことを知らされた。医者の話によると『モネの体が丈夫だったから良かったものの、そうじゃなかったら命が危なかった』とのことだ。

アリスは心底、あの危険物を食べなくて良かったと思った。

――――――モネの体力は3日ほどで回復した。しかし後日……

「アリスちゃ～ん、助けてよぉ。モネちゃんが怖いのよ～」

「ファリーヌお姉さま？」

「モネちゃんがね、新作デザートが出来たから食べろって言うのよぉ～」

「体には気をつけた方がいいわよ、頑張って」

「いやぁ～、アリスちゃんが代わりに……」

「イヤよっ！」

モネ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございました。たくさんお待たせした上にこんなのになってしまって申し訳ないです。
次回はファリーヌの登場です、よろしくお願いします。

ファリーヌ。（前書き）

更新、また遅れてしまってごめんなさい。
さて。今回は三女のファリーヌが登場します。よろしくお願いします。

ファリーヌ。

「アリスちゃ～ん。遊ぼうよぉ」
朝早くからアリスの部屋に侵入し、甘えた声でアリスの睡眠を妨害しているこの人物こそがレジーム家の三女・ファリーヌである。
「いま何時だと思ってるの？起こさないでくれないかしら」
アリスは布団から顔を出すとファリーヌをキッと睨みつけた。
「いまは４時３２分だと思ってるよぉ。少なくともぉ、わたしの時計ではそういう事になってるのだけど……」
ファリーヌは腕時計を外すとアリスに突きつける。たしかにその時計は４時３２分を指していた。
「早すぎるわ。あたしは６時になったら起きるから他の人と遊んだ方がいいと思うわよ」
ファリーヌは首を傾げたかと思うと、急に難しい顔になって何か考え始める。そしてアリスが再び眠りに付こうとした時だった。
「わたしはぁ、今日はアリスちゃんと遊びたいからぁ、６時になるまでここでアリスちゃんを見てるよ。だから寝てもいいよ？」
そう言ってファリーヌはアリスのベッドの横にちょこんと座った。しかしアリスの方はと言うと、
「見られてちゃ眠れないわよ。出て行ってくれるかしら？」
さっきにも増して目を吊り上げたのだった。
「ああ、それならいいわぁ。わたしのことなんてぇ、気にしなくてもいいわよぉ～」
アリスはファリーヌのことが好きではなかった。無神経で天然で甘え上手で人懐っこくて。アリスとは真逆の性格だったから。こういう感情は『嫌い』じゃなくて『羨ましい』とも言うのかもしれない。
でもやっぱり『羨ましい』から自分に劣等感を感じて『嫌い』になってしまう。アリスがファリーヌに抱く気持ちはそんな感じのも

のだった。
「出て行ってって言ってるでしょう！」
アリスはつい大きな声を出してしまった。それに対してファリーヌはしゅんとして涙を流し始めてしまった。そしてフラフラと部屋を出て行ってしまう始末。
アリスはドアが閉まる音を聞いたとたん、自分の取った行動を後悔した。他の兄弟ではなくて自分のところに来てくれたのが本当は嬉しかったのに、自分の意地っ張りな部分が邪魔をした。
「ごめん、ファリーヌお姉さま」
呟くがこの声は誰にも届かない。何もかもが嫌になって、アリスはもう一度眠ってしまおうかと思ったが出来なかった。頭に浮かぶのはファリーヌの無邪気な笑顔と泣いた顔……。
しばらく真っ白な壁を見つめてぼーっとしてるとドアがノックされた。時計に目をやると6時。てっきりメイドが起こしに来たのだと思って声をかける。
「起きているわ、入っていいわよ」
「はい」
メイドだから「はい」と答えるのは当たり前のことなのだが、アリスは少し違和感を感じた。ゆっくりと開くドアに目をやるとやっぱりメイド……だと思ったが、そこに居たのはファリーヌだった。メイド服を着ているファリーヌ。
「どうしたのよ、その格好。王族がそんな格好をして良いとでも思っているの？」
アリスはつい厳しいことを言ってしまった。でも、やはりファリーヌ格好は不思議すぎる。好奇心でこんなことをするとも考えにくい。
「お嬢様、朝食をお持ちいたしました」
ファリーヌは本物のメイドのように一礼すると少し大きめなお皿を持ってアリスのほうへ足を進める。
「あなた、ファリーヌお姉さまよね？」

アリスは最初は不思議がっていたものの、段々と心配になってきた。
「ファリーヌお姉さま、頭でも打ったの？大丈夫？あなたは王族で、レジーム家の三女なのよ。覚えてる？」
「覚えてるからぁ、心配しなくていいよ～」
アリスはその独特な口調と柔らかな笑顔に安心した。
「じゃあどうしてそんな格好を？」
「メイドさんが羨ましくなって、アリスちゃん専属のメイドさんの服をねぇ、奪ってきちゃった☆」
アリスの頭の中は？マークでいっぱいだ。分からないことが多すぎる。まず、なんでメイドが羨ましかったのか。それからどうしてメイド服をわざわざアリスのメイドから奪ったのか。今、本物のメイドは無事なのか？そもそもこの行動の意味が分からない。
「わたしの考えてること、アリスちゃん分かってないでしょ～？」
ファリーヌの言うとおりだった。
「当たり前じゃない」
「もぉ～、仕方ないなぁ～。説明してあげるよぉ。えっとぉ、わたしね、いつもアリスちゃんの傍にいるメイドさんが羨ましかったのぉ！だからぁ、メイドさんになったらずっとアリスちゃんと一緒にいられるかなぁって思ってねぇ、こうしてアリスちゃんの専属メイドに変身したのぉ！アリスちゃんにはすぐにばれちゃったけどねぇ～。なんでだろぉ～？」
考えても見なかった答えにアリスは驚く。そして同時にファリーヌらしいと思った。
「あたしの傍にいたくてこんなことしたの？」
「うん！」
「別にそんな事しなくても良いじゃない」
「え、でも……」
ファリーヌはまたもやしゅんとしてしまう。アリスはまた悲しませたらいけないと思い、言葉を付け足す。

「普通のファリーヌお姉さまのままで一緒に居ればいいじゃないの。あ、でも別にあたしは一緒に居たいわけじゃないわよ。お姉さまが煩いから案を出しただけで……」
「ありがとぉ、アリスちゃ～ん。わたし、これから一生アリスちゃんの傍を離れないよぉ」
アリスが微笑ましい気持ちでファリーヌのほうを向くとまた目に涙をためていたが、この涙は素敵だと思った。
「ところで、あたしのメイドはどこ？」
「えっとねぇ、頼んでも服貸してくれなかったからぁ、無理やり奪ってぇ、あたしの部屋に閉じ込めておいたよぉ」
アリスはメイドのことが心配でたまらなくなった。
「あなたの部屋にいるのね？怪我はしてないわよね？」
「うん」
ファリーヌの言葉でほんの少しの間、安心した。そう、ほんの少しの間……。
「手足を縛ってぇ、口も塞いでおいたからぁ、逃げることは出来ないもん。あ、でもぉ服奪っちゃったから寒いかもぉ」
メイドといえど、結構長い付き合いだ。赤の他人とはいえない彼女の危険にアリスは真っ青になった。
「ファリーヌお姉さま！至急私のメイドを助けてきなさい！」
「え？あ、はいぃ！」
アリスの迫力に恐怖を感じたファリーヌは急いで部屋を出て行く。アリスはファリーヌの置いていったお皿にのっているものに興味が湧いた。布で覆われているため、ソレが何か分からないのだ。そっと布を取ると甘い香りが漂う。そこにあったのは小さなマドレーヌ。アリスが小さい頃好きだったものだ。何かあるたびに口にしていたのを、ファリーヌは覚えていたのだろう。彼女はモネと違って料理が上手いから安心してアリスはソレを口にする。少し甘すぎる気もしたが、優しい味だった。

◇◆◇◆◇◆◇

あれ以来、どこへ行くにもファリーヌがついて来るため、アリスはうんざりしていた。

「ルジェ」

アリスはメイドの名前を呼ぶ。

「なんでしょうか？アリス様」

「あたしの代わりにファリーヌの相手をしてやってくれる？」

その言葉を聞いたとたん、ルジェが青ざめる。彼女はあれ以来「ファリーヌ恐怖症」になったらしい。

「ごめん、だめだったわね」

「すみません」

ルジェが頭を下げる。

「ふふ」

どこからか馬鹿にしたような笑いが聞こえる。アリスはこの声が誰のものなのか検討がついた。

「マリンヌお姉さまね？」

「ええ、貴方のメイドは出来が悪いのかしら？可哀想ね、アリス」

ファリーヌ。（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。嬉しいです。
少し長めになってしまいましたが、どうだったでしょうか？楽しんでいただけたのなら幸いです。
次回は長女のマリンヌが登場します。よろしくお願いします。

マリンヌ。（前書き）

遅くなってしまい、本当にごめんなさい！今回もよろしくお願いします。

マリンヌ。

「今日は合同授業ですので、皆さん魔術室（マジックルーム）にお集まりください」
魔術室（マジックルーム）とは兄弟全員で授業を行う際に使われる部屋だ。丈夫に作られているため、大規模な魔術を使うことができる。魔力は規模が大きいほど、時間の流れに歪みを生じさせたり物を破損したりしてしまうリスクが高まるのだ。それに耐えうる唯一の部屋がこの部屋と言うわけである。
「授業くらい一人でゆっくり受けたいものです」
「あ～あ、めんどくせぇ。オレはさぼる♪」
「よしっ！がんばろーなっ！」
「わたしも今日はがんばる～」
「騒がしいわね……」
みんな様々な言葉を口にする。分かるとは思うが上から順にレザン、グラン、モネ、ファリーヌ、そしてアリスだ。あと、もう一人……
「合同授業なんて、そんな低レベルなことやっていられませんわ。でも仕方ないので今日は低レベルな皆さんに付き合ってあげますわ」
偉そうなことを言って、偉そうに「おーっほほほほ」と高笑いするのはレジーム家の長女・マリンヌだ。
この声だけを聞けば派手なイメージがうかぶが、実際はそれとはかけ離れた姿をしている。まず目立ちたがりの彼女らしい金髪。そこまではいいが他は三つ編み&メガネの地味で真面目な格好で服装も白いワンピース。しかもそのワンピースには何の飾りも、フリルさえも無いのだ。性格とは矛盾した容姿に大抵の者は驚く。
そもそも彼女がこんな格好をしているのにはわけがある。「学校とやらで一番偉いのは委員長だと聞いたわ。その人は三つ編み&メガネのイメージが強いらしいのよ！だから一番偉い私（わたくし）もそうしたほうが威厳があると思うのよね」と言う風にいつも力説している。ま

あ、それに共感できる者はかなり少ないのだが。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「こほん、今日は拡大魔法（ビックマジック）の試験を行います。皆さん、順に教卓まで来て好きなものに魔法をかけてみて下さい」

教授と呼ばれる白ひげの老人が言う。それを聞いて一番に教卓に向かったのはレザン。優秀な彼はもちろん成功する。次はマリンヌ。

「私はこのジュエリーを」

ネックレスについている琥珀色の小さな宝石を無理やりちぎり取る。

「拡大魔法（ビックマジック）ですわ！！」

高い声で叫んだとたん、宝石がむくむくと膨らんでいく。ビー玉サイズからどんどん大きくなっていき、マリンヌの身長を越してもまだ止まらずに膨らみ続ける。彼女の魔力は兄弟のなかでも一番優れている。しかし、それを自分で制御しきれないのだ。

「皆さん、非難してください！」

教授の声でその場にいた全員が教授と膨らみ続ける宝石を残して部屋を出て行く。アリスは教室の前で固まっているマリンヌの手を取ってなるべく遠くに逃げる。魔術室（マジックルーム）といえど、制御できる力には限度があるのだ。ある程度離れたところで足を止める。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

「え、ええ。私を誰だと思っているの……」

言ってることとは裏腹にマリンヌは脅えきった様子だ。

「お姉さまの力は人より優れています。だからこそ、それを受け入れて扱わなければダメなんじゃないでしょうか？」

「私だって頑張ってるわ！私は長女ですわ…だから、出来ないことなんて……」

震える声のマリンヌにアリスは優しい声で言う。

「みんな分かってるわ。お姉さま、いつも夜遅くに魔術室（マジックルーム）で魔法の練習しているでしょう？」

温かい笑顔でほほ笑むアリスは少し、大人びた表情をしていた。
「ど、どうしてそれを？私としたことが情けない……」
マリンヌは唇を噛み締め、悔しそうにうつむく。プライドの高い彼女にとって必死に頑張る姿を見られたのはかなり屈辱的だったのだろう。
「あたしはお姉さまを尊敬してるわ。必死に頑張るお姉さまは偉いもの。でも、それを隠そうとするお姉さまは好きじゃない」
アリスは自分と同じくプライドの高いマリンヌに親近感を抱いていた。だから、その所為もあってかマリンヌの前では少しだけ素直になれた。
「アリス、ありがとう」
それはマリンヌも同じらしい。
「いえ」
2人は視線を交え、温かくて柔らかな笑みを浮かべる。意地っ張り同士だからこそ自然につくれた表情……。それは他の兄弟には見ることが出来ない、特別なものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

――――――数日後、マリンヌの部屋にて……
「お姉さま、教授が魔術室（マジックルーム）に今すぐ来るように言ってるわ」
アリスはさっき廊下を歩いていたら偶然、教授と会ってマリンヌに伝言を頼まれたのだ。
「この私がどうしてあんな白ひげのためだけに歩かないといけないのよ。アリス！どうしても話がしたいなら自分で来るように伝えなさい！」
いつも通りの偉そうなマリンヌに少し安心しつつも、アリスは思い足取りで白ひげこと教授の元に向かった。

マリンヌ。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。姉妹愛（？）をほのぼのした感じで書きたいと思いこんな風になりました～。どうだったでしょうか？楽しんでいただけたら幸いです。

ザンコク。（前書き）

お待たせしました！番外編を終了し、本編に戻ります。楽しんでいただけると嬉しいです。

ザンコク。

「なんかすげぇ個性的な兄弟だな」
アリスの話を聞いて一番にそう思った。
「ええ、あいつらはみんな変なのよ」
そういうアリスも充分変わってるんじゃないかと思う。でもまぁ他の兄弟に比べたらマシなほうなんだろう。
「そういえば、親父さんやお母さんは？」
聞いた話にはアリスの親御さんは一度も出て来なかったよな？あまり子供達のことには口を出さない主義なのか？それとも、国王・お妃様だから忙しいのかもな。
「実は私たち、お父様とお母様には会ったことがないのよ」
会ったことが無い？？自分の親の顔も知らないのか？てか、なんでだ？
「ジームゲームでは最終的な判断は国王が行うわ。公平な判断を行うためには参加者に対して感情を持たないのが一番。そのためにゲームの決着がつくまでは家族といえど、面会は許されない」
よくわかんねぇけど、レジームゲームが原因で親と会えないって事だよな。一緒に飯も食えないんだろ？やっぱり、残酷だ。
「こんなゲーム、無くなっちまえばいいのにな」
「ええ。でも何百代にも渡って続いてきたゲームよ。今更止められないわ」
運命って奴なのかもしれない。せっかく生まれてきたのに「殺される」か「殺す」を選べというのだから。なんて残酷な運命なんだろう……。俺はアリスが殺されるところなんて見たくない。兄弟を殺すところだって見たくない。それにもし、アリスが兄弟を殺したらその瞬間にアリスはアリスじゃなくなっちまうような気がする。
「残酷だな」
「仕方ないことなのよ」

そういうアリスの目には悲しみが宿っていた。まだ、後ろめたい気持ちがあるんだと思う。俺はそんなアリスを見るのが辛い。見たくない。

「レジーム家は他の家系に比べて子供が多いわ。レジームゲームのためよ。参加者が多いほどたくさんの悲劇がおこる。それをいつしか皆が楽しむようになってしまったのね……。これはもう手のつけようが無いわ。私たちの使命は皆が楽しめる残酷な悲劇を、自らの命を賭けて作ること。それが事実なのよ、受け止めるしかないわ。だって私はレジーム家に生まれてきてしまっ」

「黙れ」

俺はもう我慢の限界だった。死を悟った爺さんみたいに諦めの色をちらつかせながら語るアリスをだまって見ていられるほど、俺は出来た人間じゃない。

「なによ、急に」

急にキレた俺にアリスは驚いているようだ。

「あたしは敬語は使わなくてもいいって言ったけど、自分の立場を弁えなくてもいいなんていった覚えは無いわ。あんたはあたしに命令できる立場じゃないのよ！」

キッと釣りあがった目はとても生き生きしていて少し、落ち着いた。

「分かってる。俺はアリスの下僕だ」

「そうよ！さっきの言葉に対して謝るのが妥当じゃないかしら？」

「俺は謝らないぞ」

元をたどれば、アリスが変な話をしたのが悪い。あんな消極的ならしくない話しておいて、だまってきいてろなんて無茶だ。

「どうしてよ！？」

「アリスが変なこと言うからだろ！」

「あたしは事実を言っただけじゃない」

まあ、アリスが言ったことは事実かもしれない。恐らくそうなのだろう。でも俺がもっと嫌だったのはそれをアリスが受け入れてる

ってことだ。そんなアリスは……嫌いだ。
「俺はアリスにそんな残酷な運命を受け入れてほしくない。アリスには、アリスのままでいてほしいんだよ！」
「運命は受け入れなくてはいけないものよ」
そんな落ち着いた声が更に俺を苛立たせた。
「そういうところが嫌なんだ。アリスにはゲームに勝つことを目標にして欲しくない。このゲームを終わらせることを目標にして欲しい。それが嫌なら、俺が終わらせて見せる！！……アリスには十字架を背負って生きてほしくなんか無いんだ。優しいアリスのままで、いてほしいんだよ……」
無意識に俺はそう言い放っていた。無意識といってもこれが俺の本音で、俺の望む全てだ。
「……せっかく諦めかけてたのに、あんたの所為で台無しじゃない。……ジルの、バカ」
アリスはすっかり冷めた紅茶が入ったティーカップを俺に投げつける。おかげで俺は紅茶をかぶっちまった。高そうなアリスの愛用しているティーカップだって割れちゃったし。怒らしちまったかなぁ。
「悪い」
素直に頭を下げる。悪気は無かったが、機嫌を損ねちまったのは他でもない俺だかんな。
「わ、悪いと思うなら、全力で、あたしを……守りなさいよね」
「ああ、そうさせてもらう」
アリスはこくりと頷くと、色白ですらっとした奇麗な指で俺の頬をなでた。意味不明な行為だったが、後から聞くと「ティーカップで怪我させちゃったから治してあげたのよ」ということだった。それに加えて「あれくらいで顔赤くしちゃって、気持ち悪かったわよ」と鼻で笑われた。

ザンコク。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。今回は久々にジルが登場しました～。本編に戻ったということで、次回からも頑張りますのでよろしくお願いします。
前回までの番外編はアリスの兄弟のことを皆さんにも知ってもらおうということで書いていました。なんとなく分かっていてくだされば幸いです。

イセカイジン。（前書き）

遅くなってごめんなさい。今回もよろしくお願いします。

イセカイジン。

ここ―――アリスの城では、ある事件が起こっていた。
それはちょうど一週間前のことだった。メイドが1人、買出しへ行く最中に亡くなったのだ。原因は不明らしいがたくさんの血を吐いて倒れていたらしい。
それからずっと一日に1人ずつ、城の関係者が命を落としていった。ガードマンに執事、メイド、コック……全部で8人。今日も牢獄の管理人が無くなった。
みんな、たくさんの血を吐いて倒れている姿で発見されたようだ。まるで、ジャンのように……。今、彼らは冷凍室で深い眠りについている。

「今までの事件は他殺だと思われます。皆が同じように亡くなっていることから同一犯の犯行だと考えていますが、どの現場にもこれといった手がかりは見つかりませんでした。恐らく魔術による犯行ではないでしょうか？」
ソフィアが淡々とした口調で言う。今、俺たちはこの連続殺人事件についてアリスの部屋で話しているところだ。ソフィアとアリス、それから魔術研究者のノームに俺という少ないメンバーでの話し合いだが仕方が無い。城の中に裏切り者がいる可能性を考えるとこうするしかなかったようだ。
「犯人は特定できないけれど、まずはこれ以上死者を出さないことね」
そっと目を伏せるアリス。人には見せないがかなり悲しいんだと思う。
「ああ。とりあえず、皆を城の外に出さなきゃいいんじゃないか？」
城の中なら外よりは何十倍も安全だし、いざとなれば戦える奴だ

ってたくさんいる。我ながらいい案じゃないか。なんて思ってると、この日初めてノームが口を開いた。
「実際ジャンは城の中で亡くなっておる。犯人は間接的な魔術を使用しているのではないじゃろうか。だから城の中にいようと防ぐのは難しいと思うのじゃが」
遠まわしに「今日の殺人も防げない」と言っているノームに正直ムカついたけど、魔術研究者なだけあって一応筋は通っている。
「ならどうしたらいいのよ」
悔しそうに唇を噛み締めるアリスだがこの一週間誰にも涙を見せていない。アリスはなんでも1人で溜め込んじゃう性格だからよけいに心配だ。
「犯人はきっとお兄さまやお姉さまの関係者よ。汚い手を使うものね……」
やっぱりアリスの兄弟が関係しているみたいだな。でも王族の使いとなると手ごわい奴に違いない。ノームがいうには間接的に殺人が出来るらしいしな……。
「せめて結界的なのでも張れればいいのになぁ」
なんとなく呟いた言葉だったんだけど、俺のその一言でノームが気持ち悪いほどにしょぼしょぼな目を輝かせた。
「結界……なかなかいいことを言うじゃないか、小僧！どうじゃアリス様。貴方のお力で無効化（ノンマジック）の結界を張ってみては」
アリスは難しい顔をしつつも頷く。なにか問題でもあるのか？
「どうかしたか？」
「城一帯に結界を張るなんてかなりの魔力が必要なのよ。私が頑張ったところで半日で限界だわ」
ああ、この城無駄に広いもんな～。
「大量の魔術を使い続けてはアリス様のお体が危険です」
そうなのか？だったらソフィアの言うとおり、アリスに危険が及ぶなら出来るだけそれは避けたいな。
「大丈夫よ」

「いや、やはり止めるのが妥当じゃ。アリス様の魔力を消耗させるのが奴らの目的かもしれんからの」
アリスは誰になんと言われようとも結界を張ると思う。自分の参加するゲームの所為で次々と人が死んでいくのだから、優しいアリスには自分を守るために他人の命を奪うなんて選択は出来ないんだろう。
「なるべく魔力を消耗しないで結界を張る方法は無いのか？」
せめて消耗魔力を減らすことが出来たら……
「うむ。あるといえばあるのじゃが、あまり薦められんのぉ」
薦められるとかそんなことを言ってる場合じゃないだろ。
「どうすればいいんだ？」
ノームは眉間にしわを寄せて難しい顔をする。そう簡単にはいかないみたいだな。
「……異世界人の生き血を飲めば魔力を高い状態で一定に保つことが出来るのじゃ。そうすれば魔力の消耗など問題ではないんじゃが」
異世界人の生き血。異世界人……つまり俺の生き血が必要ってことだな。
「で、どれくらいなんだ？」
「何がじゃ？」
「どれくらい、生き血が必要なんだ？」
「ああ。とりあえず、コップ一杯分くらいで一週間はもつじゃろう」
コップ一杯分、か。死にはしないよな。よし……。俺はアリスと約束したんだかんな。全力で守るって。アリスが皆を守るために魔力を使うなら俺も全力で力を貸す。生き血くらいいくらでもくれてやるさ。今の俺に出来るのはこれくらいだ。
「目覚めよ、レッド」
レッドの体から怪しげな光が放たれる。
「なんだよ主（あるじ）。オレになにか用か？」
久々に目を覚ましてご機嫌なレッド。伸びをしながら相変わらず

偉そうに仁王立ちしている。
「刀に……なってくれ」
「あ？もしや戦いか！？ついに俺様が役に立つ日が来たか～。うっし！変身だぜ！！」
あやしく体を光らせると一瞬にしてレッドは大きな刀へと姿を変える。ノームやアリス達は急に刀を手にした俺を不思議そうに眺めている。俺はそんな空気の中で刀を手首に当てる。どくどくと流れ出す真っ赤な血を近くにあったティーカップへと流し込む。カップがいっぱいになってもまだ俺の血は止まらずに流れ続ける。そして俺は……意識を手放した。
「ジル！！！」
そう叫ぶアリスの声が最後に聞こえたような気がする……

イセカイジン。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。ちょっと短かったかもですね……。
次回もよろしくお願いします。

サツジンハン。（前書き）

遅くなってすみません。

サツジンハン。

ここは……何処だ？

真っ暗だ。何も見えない。何も……聞こえない。

俺、どうしちまったんだ？

たしか、俺はアリスのために生き血を……。あ、俺は死んだのか？魔界で自殺して出血多量で死んだのか？？こんな形で人生が終わっちまうとはな。でも、死ぬほど大量に出血したんだろ？じゃあ、これでアリスは城のみんなを守れたかな。

『月方　京也』

やけに機械じみた声が聞こえた。

ツキガタキョウヤ？あ～俺の名前、そういえば京也だったな。しばらくジルって呼ばれてたからなぁ。てか誰？？

『お前の命をくれ』

命をくれって……。俺、もう死んでるんじゃねぇの？

『お前が命をくれれば、もうアリスの関係者に手を出すのをやめよう』

アリスの関係者に……？あ！まさか、あんたが連続殺人の犯人なのか？

『ああ。ちなみに次のターゲットはソフィアだ』

っ！やめろ！ソフィアには手を出すな。これ以上、アリスを悲しませないでくれ……。

『ああ。その代償としてお前が命をくれたら、な』

俺の命？俺の命でみんなが助かる……。でも……

だめだ！俺は死なない。アリスと、約束したから。死なないって約束したから……！

『ならば、ソフィアを見殺しにするのだな。お前が命をくれるまで、この殺人はつづく。全てはお前次第だ。月方　京也……』

っ！！！

『我が名はウィーヴァル。気が変わったら我を呼ぶがいい』

「……ル……ジル、ジル」

ん、アリスか？

「ん……」

まぶたを開くとアリスにソフィア、ノームにレッド、グリーン……。みんながベッドに横たわる俺を覗き込むようにして見ていた。

「ジルのバカ」

目が覚めて一番にそう言われた。

「悪い。結界は、張れた、か？」

さっき切った左手首がズキズキとうずく。力が入らなくて、うまく話せねぇ。カッコわるいな、俺……。

「ええ。血、ありがと」
「ああ」
俺の血もちゃんと役に立ったんだな。アリスも元気そうだし、命が危ないってことは無さそうだな。ウィーヴァルもこれでもう殺人は出来ないだろ。あいつのこと……別に口止めされてるわけでもねぇし、言ってもいいんだよな？
「殺人犯、はウィーヴァル、で俺の、命を、くれたら、もう誰も、殺さないって」
俺の言葉にその場に居た全員が反応した。一番大きく反応したのはノームだった。
「小僧、ウィーヴァルに会ったのか！？」
ノームが大きく目を見開いて訊いてくる。ウィーヴァルてそんなに有名な奴だったのか？
「ああ。俺、死ねば良かった、か？」
「結界はちゃんと張ったわ。だから、あんたが無駄死にする必要は無かったわよ」
無駄死に…か。アリスらしいな。
「あ、ソフィア……」
「なんですか？」
「次の、ターゲットは、お前だ……気ぃ付けろよ」
ターゲットが分かってれいればきっと守れるはずだ。しかも、そのターゲットはソフィアときたらぐんと殺人を止められる可能性は高まる。ソフィア、強いし。
「私はあんな馬鹿に殺されるほど弱くありませんので、心配無用です」
ほらな。これでとりあえずは一安心だな。
「そうとなれば、早速作戦を立てようじゃないか。小僧、よくやった。大手柄じゃ」
一応、役に立てたみたいだな。良かった。貧血で体調はめちゃく

ちゃ悪いけど。

サツジンハン。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。今回も少し短かったかもです。次回は作戦会議＆戦いって感じになると思います。よろしくです。

サクセンカイギ（前書き）

またまた遅くなってしまい、すみません。。

サクセンカイギ

「ウィーヴァルということは……犯人はグランお兄さまでほとんど間違いないわね」
そう言ってアリスが目を輝かせる。犯人に近づけたのがよっぽど嬉しいんだろうな。
「ノーム、ウィーヴァルの詳細を説明してくれるかしら？」
もう悲しそうな目もしてないし、いつものアリスに戻ってる。
「いいじゃろう。ウィーヴァルは現在グランの率いる部隊に属しておる、魔術師じゃ。他人（ひと）の体の中に入り込む能力を持っておる」
人の体に入り込む？どういうことだ？？
「ノームさん、もう少し分かりやすく説明していただけますか？おそらく、ジルが理解できていないので」
悔しいけど、ソフィアの言うとおりだ。第一、人間界じゃ”人の体に入り込む”なんて表現めったに使わねぇし。
「まったく……仕方ないのぉ。つまり、ウィーヴァルは他人の体の中に自分の魂を送り込んでその人物を操ることが出来るのじゃ」
呆れた表情をして、たまにため息を付きながらもノームは俺にも分かるように説明してくれた。にしても、やっかいな能力だな。結界って魂の侵入も防げるもんなのか？
「あんな気持ち悪い奴の魂を自分の中に入れるなんて……そんなこと、私は絶対させません！気持ち悪すぎですよ！」
ソフィアって結構毒舌だよな。ウィーヴァルだっけ？あいつもこんなに女の子から気持ち悪いって言われるなんて可哀想な奴だ……。
「ウィーヴァルってそんなに気持ち悪い奴なのか？」
俺、この前会ったときはあいつの顔見てねぇんだよな～。声しか聞えなかったし。
「ん～いつも仮面を付けていて、誰も素顔を見たことなんて無いわ。だから見た目は何とも言えないのだけど、性格が気持ち悪いのよ」

性格？うっわぁ。性格が気持ち悪いとか最悪じゃねぇか。俺だって性格が気持ち悪いなんて言われたこと無いぜ？つかアリスにまで言われてるし。
「そうですよ！仮面オタク&ナルシストなんです！ちなみに口癖は「この美しき仮面は世界一美しい我のために存在しているのだろう」です。たいして奇麗でもない仮面をあそこまで褒められる神経が私には理解できません。それに、仮面なんて誰が付けても似たようなものじゃないですか！」
ソフィア……。ウィーヴァルにそんなにも恨みがあるのか？ま、敵だしな。つかあいつ、マジで気持ち悪いんだな。”性格が気持ち悪い”の意味が分かったような気がする。
「で？ノーム。あいつの弱点は？」
「うむ。あいつは精神的に弱っている者の体にしか入り込むことができぬのじゃ。それが奴の弱点かのぉ」
ってことは、今まで殺された人たちはみんな”精神的に弱ってた”ってことか？じゃ、ソフィアが目を付けられたのも精神的に弱ってる……から？
「ソフィア！なんか悩みでもあんのか？？」
「は？なんでそんな話になるのですか？」
キツイ口調に少しびっくりした。ウィーヴァルへの恨み？を俺にぶつけるのは止めてくれ。
「確かにそうね。何かあってからでは遅いわ。何か不満でもあったら言って？ソフィア」
珍しく優しい口調のアリスにソフィアは目を大きく見開いた。
「いえ。そんな……アリス様のお傍にいられるだけで私は幸せです！」
必死に訴えようとするソフィア。でもきっとソフィアのアリスに対する気持ちはアリス自身が一番よく分かってるんじゃないかな。
「ありがとう。でも貴女だってやりたいことはあるでしょう？どんな小さなことでもいいわ。この際、言ってくれないかしら？」

アリスってこういう優しいところもあるんだな。たまにはこういうのもいいかもな。
「えと、では……そのぉ……」
何か言おうとしてるな。てっきりソフィアのことだから「アリス様のお傍にいられるだけで私は幸せです」で通すのかと思ってた。アリスも俺と同じだったみたいで、驚いたような、嬉しそうな表情をしている。
「何？あたしだって貴女に頼ってばかりじゃいられないわ」
優しくほほ笑むアリスに、ソフィアは気まずそうにしている。
「あの、私、アリス様を……笑わせたいです！」
ソフィアは頑張って言ったんだろうけど、その場にいた皆はポカンとしている。もちろん、俺も。
「笑わせたい？」
アリスも予想外だったようでソフィアに聞き返す。
「はい！最近はアリス様の笑ったお顔を見ていないので。私などがアリス様を笑わせるなど、やっぱり……」
どんどん声が小さくなっていく。アリスの前ではやけにネガティブだな……
「ふふ……あはははは！」
アリスは一度驚いたような顔をして、いきなり笑い出した。
「ソフィア、ふふ…もう十分笑わせてもらったわ。貴女、私とは関係ない欲望とかは無いの？……ふふ」
よく分からないが、笑ってくれたアリスにソフィアも自然に笑顔になっていった。俺もたぶん、いま笑っていると思う。大切な女の子たちの、自然な笑顔を見ることが出来たのだから。もしかしたら今日、初めて見たかもしれない。
考えてみればアリスもソフィアも人間界だったら中学生か高校生くらいだろ？友達とわいわい騒いでる年頃だろ？そんな子が心から笑えないような環境なんて俺は嫌いだ。２人からずっとこの笑顔が

消えないといいな。なんて俺らしくもないことまで思っちまった。

これから起こることとは裏腹に、アリスの城には平和な空気が漂っていた。

サクセンカイギ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました！
次回、ウィーヴァルが登場するはずです。よろしくです。

本当のハジマリ。（前書き）

遅くなってすみません。お待たせしました！

今日からまた再開します。

本当のハジマリ。

城のみんながこれから始まるであろう大戦争に備えて慌しい日々を送っている中、俺たちは呑気にお茶会をしていた。アリスが言うには「グランお兄様に勝算なんて無いわ！」という事らしい。よっぽど自信があるのだろう。でも、そのおかげか最近アリスやソフィアは笑顔でいることが多くて城の雰囲気はどこか温かかった。

「ソフィア、これにお茶をもう一杯くれないかしら？」

そう言ってアリスがめちゃくちゃ高そうな戸棚から出したのは桃色のバラの飾りがついたティーカップ。いつの間に買ったのか、それとも俺が見たことが無かっただけなのか分からないけど、アリスらしい高そうなものだった。

「はい」

ソフィアは不思議そうな顔をしてティーカップを受け取ると慣れた手つきで紅茶を入れ始める。んにしても、なんで2つもティーカップが必要なんだ？それにアリスがおかわりなんて珍しい。いつもなら薦めても「紅茶は一度にそんなに飲むものじゃないわ。ゆっくり味わって飲むからこそ美味しいんじゃない！」なんて毎回、力説してるのに。ソフィアもそれで”違和感たっぷり！”みたいな顔をしてたんだろう。

「どうぞ、アリス様」

あっという間に紅茶を入れ終えて、丁寧にアリスに渡そうとするソフィア。それなのにアリスは「あたしは一杯で十分だわ」とお決まりの一言。

自分で催促しといて要らないって意味わかんねー。どうしたんだ？アリス。ソフィアなんて今にも泣き出しそうな顔してるじゃねぇか。

「アリス様？あの……」
震える声で訊ねるソフィアの言葉を遮ってアリスはまたもや不思議なことを言い出した。「あなたの分よ」なんて澄ました顔でさ。
そしてきょとんとするソフィアにもう一度言い直す。
「あなたがそれを飲むのよ。そのティーカップもこれからは貴方の物なの。明日からはわたしの紅茶を用意するとき、貴方の分も一緒に淹れてきなさい。そして、一緒にお茶するのよ」
そんなアリスの言葉は余計にソフィアを混乱させてしまったようだ。さらに「ジルの分も用意してあげてちょうだい」なんて言うもんだから俺まで驚いちまったじゃねぇか。
「アリス様？あの、私はそんなご無礼なこと……」
「これは命令よ！別に貴方達のためじゃないわ。ただ、一人でお茶するのに飽きてきただけよ。分かった？」
これはアリスなりの気遣いなんだと思う。ウィーヴァルの件があってからアリスはどこか優しくなった。従業員のみんなの”心が弱っている”状態を無くすために頑張っているんだと思う。
「では、いただきます」
そして、みんなもそんなアリスの優しさを温かく受け入れている。ソフィアが控えめに紅茶をくこりと飲んだときだった……「バタンッ」なんて鈍い音がして崩れ落ちるようにしてソフィアが倒れたのは。

「ソフィアッ！」
アリスが血相を変えて駆け寄る。
「んん…やめ、な、さい」
ソフィアは険しい顔をして何度もそう繰り返す。いきなりのことでその場に居た皆が慌てていたが、
「ウィーヴァ、ル……」
ソフィアのこの言葉で全てを悟った。ウィーヴァルが、ウィーヴァルの魂がソフィアへの侵入を試みていることを。そしてソフィア

の額に汗が溜まり始めた頃……
「き、気色悪いですっ！！！！」
その言葉を境にソフィアは正気に戻り、俺たちの目の前には仮面オタク&ナルシストことウィーヴァルが姿を現す。
「ちっ、この我が侵入に失敗するとはっ！」
あの時聞いた機械じみた声が響く。
「あなたみたいなのが私の中に入るなんて気持ち悪すぎです！誰が入れるもんですかっ！！」
やっぱ、ソフィアってすげぇ。俺は改めて尊敬した。それと同時にレジームゲームの本当の始まりを目にしたような気がして、少し、怖くなった。
「よくやったわ、ソフィア。あとはあたしに任せなさい」
息が上がっているソフィアを庇うようにしてアリスがウィーヴァルの前に立ちはだかる。
「アーリース♪オレの大事な下僕を傷つけるのは止してくれるかな？」
そう言って現れたのはアリスの兄さんであり、このゲームの敵であるグラン……

本当のハジマリ。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。
改訂作業の都合により更新が遅れるかもしれません、すみません。

センセンフコク。（前書き）

遅くなりました！
ごめんなさい。

センセンフコク。

「アーリース♪オレの大事な下僕を傷つけるのは止してくれるかな？」

そういって現れたのはグラン。アリスに聞いていたとおり、ツンツンとした金髪でピアスを邪魔なほどに付けている。俺としては関わりたくない人の部類に入るグランとやらは俺を見てふっと笑う。

って、何でだよっ！？

「せっかくアリスが可愛いのに、下僕は美しくはないようだね」

いやいや、俺は美しさを追及するなんて趣味は持ち合わせてないっていうかいきなり美しくないって失礼じゃねぇか。

確かに俺はアンタみたいに王子様を連想させるような顔立ちはしてねぇけどさ。これでも一応それなりにモテてはいた……んじゃねーの。

「あたしはグランお兄さまのような”イカツイ”奴よりもジルみたいに忠実な犬のほうがよっぽど好きよ」

ほらな。アリスだって……ん？　今スキって聞こえたんですけど。アリスの声でスキって！　スキって好き？　って、アリスが俺を？

いや、でも犬って言ったよな。だけどさ、たとえｌｉｋｅ（ライク）だとしても素直に嬉しいんだけど。

軽く舞い上がった俺にアリスがあいかわらずキツい口調で言葉を放つ。

「ちょっと、ジル！」

うわー。すげぇもんだな。なんかいつもより数倍アリスが可愛く見えるんですけど。

「んぁ？」

「しっかりしなさいよ！」

アリスが俺をキッとにらむとグランがいきなり笑い出す。って何でなんだよっ！　俺、なんかコイツとはウマが合わねぇみたいだ。

コイツの行動原理のすべてが理解不能だもんな。
「アリスちゃん。簡単に好きとか言っちゃダメでしょ～？」
意味ありげにニヤっと口元を吊り上げると「ほら、下僕くんみたいなのは誤解しちゃうよ♪」だなんて。ありえねぇって。俺はそんなんで変な誤解するほど馬鹿じゃねぇっつの！　そりゃ、ちょっとは期待しちゃったりはしたかもしんねーけどさ……。
「あ、あたしはそんなこと言った覚えは無いわ！　それより、何の用なの！？」
アリスの問いにグランの目つきが変わる。なんてゆうか、真剣な目に変わったんだ。
「もちろん、レジームゲームだけど？」
その言葉がグランの口から放たれた瞬間、みんなの顔が曇ってピリピリとした空気が張り詰める。
「あたしを殺すつもり？」
冷静に言い放ったアリスにグランは首を振る。どういうことだ？
レジームゲームのためにここに来たっていうのに、アリスを殺すつもりは無いってことか？　やっぱり、理解できねぇよ。
グランが重々しく口を開く。
「アリス、俺と組まない？」
おっ！　これっていい話なんじゃね？　グランがアリスに協力してくれるんだろ？　最低でもここは平和に収まるわけだし、アリスが勝てる可能性もぐんと上がるわけだし。
なのに……
「イヤよっ！」
アリス。お前はどうしてそんなにも強気で勝気なんだよ。そんなあからさまに否定することもねぇだろ。断るにしてもな、ちょっとくらい考えてもいいんじゃねぇか？
「ふーん。じゃあ、ゲームしようよ♪」
「ゲーム？」
「ああ。俺たちの命を賭けて、さ♪」

そう言って怪しい笑みを浮かべるグラン。そんなグランを勝ち誇ったような笑みで見つめるアリス。

二人のシルエットが淡い光を放つ月明かりに浮かび上がった。

センセンフコク。（後書き）

ありがとうございました。

ゲームスタート。（前書き）

おそくなってすみません。

ゲームスタート。

「ふーん。じゃあ、ゲームしようよ♪」
「ゲーム？」
「ああ。俺たちの命を賭けて、さ♪」
明らかに不利な申し出。だけど、アリスはやっぱり……
「いいわよ」
なんで、そう簡単に命を差し出すようなマネをするんだ。でもアリスが決めた以上、俺には”下僕”としての使命ってもんがある。
「アリス様っ！」
だけどさ、アリスが危険な目にあったりすると、ソフィアたちはこうやって一生懸命それを阻止しようとするんだ。
「アリス様、駄目じゃ！」
ノームだって。みんな、アリスのことが心配で、大切なんだよ。でも、アリスは何でもかんでも無茶しすぎなんだ。だから、俺はそんなアリスを支える。そのために、俺は今こうやって”下僕”なんてしてるのかもしれない。
「ルールはオレが決めるよ」
グランが楽しそうに言う。
「いいわよ」
でも、そこは否定してくれないか？　だってさ、自分より強い奴にルール決めさせるってのはどうかと思うんだけど……。
さらに俺たちが不利になるわけじゃん？
「そーだなぁ、じゃあ下僕戦ってのはどう？」
グランがにやっと口元を吊り上げて言う。ほらな、やっぱり変なこと言い出したじゃねぇか。
「下僕戦？」
「アリスの下僕くんと、うちのイーヴァルを戦わせる。もちろん、オレやアリスも手を貸していいっていうルールでさ♪」

つまり、俺がイーヴァルと戦うってわけだな。何度も言うけどさ、俺、人間だぜ？　悔しいけどさ、よくわかんねー仮面野郎のほうが力があるのは確かなんだけど。
「ジル、いいかしら？」
アリスにそう尋ねられる。俺は断らねぇーよ。お姫様が戦うってのに俺が逃げてたんじゃ、男が廃るっての。
「ああ」
俺が答えると、グランとアリスの目つきが変わった。二人ともやけに楽しそうで、それでいて真剣な目でお互いをじぃっと見つめている。
グランがゆっくりと口を開いた。
「じゃあ、さっそく始めようか♪」
「ええ」

「ジル、こっちに来なさい」
アリスに促されて俺はウィーヴァルと向かい合うかたちで立つ。目の前で勝ち誇ったように笑う仮面野郎がなんだかすっげームカつく。
俺もこいつに負けないくらい強くならねーとな。
「目覚めよ、レッド・グリーン」
俺の言葉で現れたのはやけに上機嫌なレッドとグリーン。
「主！　戦いだなっ！？」
「主人、でしたら僕は頑張りますよ」
皮肉なことに俺はこいつらの力を借りなくちゃ、ただの弱い人間だ。でも、それでアリスを守れるならレッドとグリーンには感謝しないとな。
「ああ。頼む！」
そう言った瞬間、俺は白い光にやんわりと包まれた。って、何これ？　武装するときってこんな派手な演出とかあったか？？
まあ、よくわからねぇけど俺は武装できたわけだ。

がっちりした鎧なんて着ちゃってさ。腰にささってるのは水鉄砲もどきのピストル（※グリーンです）で、手にはでっかい刀（※レッドです）が持たされている。
人間界にいたときにハマってたゲームの主人公がたしかこんな格好してた気がする。
「ジル……？」
なぜだか俺をみてアリスは大きく目を見開いている。となりにいるソフィアもノームも。やっぱりみんなもこの変な変身シーンみたいなのに驚いたのか？　そりゃ、俺だってびっくりしたし。てか、結局あれは何だったわけ？
「絶対に、勝つのよ！」
「頑張ってください」
期待を秘めた目でそう言うアリスとソフィア。そのとなりではノームが「頑張るのじゃ、小僧！」なんて言いながら俺をすっげー怖い目でにらんでいた。
「ああ！」

「準備はいい？　アリス♪」
グランが静かに髪をかきあげる。
「ええ！」
まっすぐにグランを見つめてそう言ったアリスのきれいな金髪が、風でふんわりと揺れる。

『ゲーム、スタート！』
アリスとグランの声が重なった。

ゲボク戦。（前書き）

遅くなりました！

ゲボク戦。

『ゲーム、スタート！』
アリスとグランの声が重なった。

戦場はアリスの城の屋上。
今日は月が綺麗だ。赤くぼんやりと光るそれは残酷なほどに、美しい。

「かかってくるがいい」
そう言って口元をニヤリと吊り上げるウィーヴァル。
だけどさ、こんなに余裕かましてる奴に何の策もなく突っ込んでいくほど俺はバカじゃねぇ。
「アリス、どうすればいい？」
俺の少し後ろにかまえるアリスに指示を仰ぐ。
「そうね……アンタの好きにしていいわよっ！」
返ってきたのは予想もしなかった、いやしたくなかった返事だ。
まじかよ……！
「負けてもしらねぇぞっ」
なんて言いながら、真正面からウィーヴァルに突っ込んでいく。
だけどさ、俺、負けるわけにはいかねぇんだ。アリスやソフィアを守るって決めたんだから。
「うぉおおおおおおおおお！」
俺はでっかい刀を力任せに振りかざす。
けど、ウィーヴァルはいとも簡単にそれを避けるんだ。
「おっと……そんな野蛮な」
口元に笑みをたたえたままさ軽々と。
まあ、あたりまえだよな。ウィーヴァルは魔界の、しかも王族の下僕だろ？　弱いわけねぇじゃん。だってさ、この下僕戦の間はそ

いつに命を預けるわけだろ？
グランのやつ、よっぽどウィーヴァルに自信があるに違いねぇ。
第一、下僕戦を持ちかけてきたのはグランだ。勝算が無くちゃ、そんなマネできねえし。
「くそっ！」
だけど、俺はこの身体が使えなくなるまで戦い続けようと思う。
アリスたちは俺を信じてくれてるんだから。
「おりゃあああああああ！」
俺は力いっぱいに刀振りかざす。
ウィーヴァルはすかさず右にひょいっと避ける。だがな、いつもいつも右にばかり逃げてるんじゃ、俺だってアンタに刀あてるくらいできると思うんだけどっ！
「っ！」
俺はウィーヴァルのわき腹に思いっきり刀を走らせる……はずだった。なのに俺の想像していた残酷な音なんていつになっても聞こえなくて、かわりに鋭い金属音が響く。
俺の渾身の一撃をイーヴァルがとめたんだ。アイツの手に握られているのは……
「……槍っ！？」
俺の身長と同じくらい、いやそれよりも長いかもしれない槍。鋭い槍先は一突きでもされたら、間違いなく重傷を負うだろう。
打ち所が悪ければ、最悪の場合死んでしまうかもしれない。だけどさ、
「戦いってこーゆーもんなのなっ！」
やっと分かったぜ！　俺は何が何でも勝たなくちゃいけねぇ。たとえ、この身体が動かなくなっても、戦い続けなくちゃいけねぇんだ……勝つまではっ！！
”命を懸けて戦う”
それがこのレジームゲームってやつなんだろ？
俺はこんな醜い争いを止めるためにも、こいつを倒す！

「っ！　あっぶねー」
次から次えとすごい勢いで俺に向かってくるアイツの槍をよけるのは結構つらい。地面に足をついてる暇もないくらいに！

――俺は、絶対に負けない！　負けられない！！――

ゲボク戦。（後書き）

ありがとうございました！

レッドノチカラ。（前書き）

おそくなりました！

レッドノチカラ。

「ぐはっ！」
そううめき声をあげたのは俺だった。
槍が、さ……俺の右胸に刺さってんだよ。俺がさっと避けたからなんとか心臓は刺されずに済んだ。
――アイツ、本気だ――
ウィーヴァルは確実に俺の心臓を狙ってきた。俺を、殺しにきたんだ。

「かはっ」
急に喉に違和感が襲ってきて、俺は大量の血を吐いた。
刀を握る手に力を入れる。立ちたいのに、立てない。
「くそっ！」
さっきまで焼けるように痛んだ胸も、もう何も感じないんだ。力が、入らない。
「動けっ！　動けよっ！」
使えない足をたたいても体力を消費するだけに過ぎない。
「ジルっ！」
アリスが血相を変えて俺に駆け寄ってくる。それなのに……
「来るな」
それなのに、俺はそう言っちまった。俺はアリスのそんな顔が見たくて戦ったわけじゃねぇ。アリスを守るためにこの刀を振るうんだ！
「うおおおおおおおお！」
刀を杖にして震える足に力を込める。ふらふらしながらも何とか立って、再び刀をかまえる。
「おやおや、まだ立てたのですか？」
ウィーヴァルはフンと鼻で笑って、余裕な表情で槍をくるくると

操る。その動きはやけにしなやかなのに比べて、でっかい刀を持ってるだけで体中が悲鳴を上げている俺はカッコわりいかな。
「レッド、行くぞ……」
俺は息を荒立ててウィーヴァルに刀を向ける。月明かりを帯びて光る刀の先は確実にウィーヴァルを捕らえた。
「ウィーヴァルっ！」
思いっきりアイツにむかって走る。俺の身体がどうなろうとそんなの知ったことじゃない。男には命をかけてでも守りたいってものがあるんだ。それはときに大きな力になる。
「刀が……生きてる！？」
アリスが目を大きく見開いた。
「おりゃあああ！」
振り下ろした刀には確かな手ごたえがあった。
「き、貴様っ！」
刀は、レッドはまるで噛み付くかのようにウィーヴァルの肩に刺さっている。深く、しっかりと。
俺にまだこんな力のこってたのか？　いや、そうじゃない。
「刀が……」
ソフィアも気が付いたみたいだ。そう、さっきアリスが言ってたように”刀が生きてる”んだ。燃えるような炎に包まれた刀は踊るように火花を散らす。
「レッド？」
俺は変身中は口が利けないはずのレッドに声をかけた。
「おう！　どうした、主。戦うんだろ？」
「ああ！」
即座にウィーヴァルの肩から刀を抜く。肩からは痛々しいほどに出血していて、思わず目をそらしたくなる。
「これで、おあいこだな」
なんて余裕かましたフリして言ってる俺ももう限界。すっかり力が抜けちまった。

「ずいぶん派手にやってくれましたねぇ……はぁ、ですが、その様子じゃ貴方もそろそろ限界ですか」
自分だって息が上がってるくせにウィーヴァルはそう言ってにやりと口元を吊り上げた。まあ、そうだろうな。皮肉なことに俺はもう立つことすらできねぇんだから。
「これで、終わりだっ」
槍の矛先がまっすぐに俺に向けられる。

レッドノチカラ。（後書き）

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2001m/

俺、下僕です。

2011年5月20日21時59分発行